

「MOX燃料加工施設についてご意見を聴く会」議事録

日 時 平成17年3月26日（土）

13:00～17:00

場 所 青森グランドホテル 平安の間

【司会】

MOX燃料加工施設についてご意見を聴く会を開会いたします。

私は司会を務めさせていただきます、青森県資源エネルギー課の桜庭でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは開会にあたりまして、三村知事よりご挨拶を申し上げます。

【青森県 三村知事】

どうも皆さん、こんにちは。

また、雪が降りまして、本当に今年は雪の多い年でございます。そういった足元、交通事情等悪い中でございましたが、こうしてご参集たまわりましたこと、心から感謝申し上げる次第であります。

さて、本日、県内各界、各層の代表の皆様、ならびに一般参加の皆様におかれましては、ご多忙のところご出席賜わり、厚く御礼申し上げます。

MOX燃料加工施設につきましては、平成13年8月に日本原燃株式会社から立地協力要請を受け、県として安全確保を第一義に慎重に総合判断する必要があることから、同施設の安全性につきまして、平成13年9月から平成14年4月にかけて、各分野における専門家によるチェックそして検討を行い、その結果、安全確保の考え方及び安全対策は妥当であるとの結論を得たところであります。

この検討結果につきましては、平成14年4月から7月にかけて県議会議員、市町村長、当時の原子力政策青森賢人会議等に対し説明をし、ご意見を伺ったほか、県内6地区で県民を対象といたしました説明会を開催するなど、広く周知を図ってきたところであります。

その後、平成14年8月の東京電力株式会社による不正問題や、日本原燃株式会社における使用済燃料受入れ貯蔵施設のプール水漏洩問題など、六ヶ所再処理施設を巡る様々な動きがあったことから、県としては、事実上検討を中断せざるを得ない状況が続いてまいりましたが、日本原燃株式会社において第三者外部監査機関による定期監査の実施や、品質保証体制が改善されたことなど、検討を中断してきた要因が取り除かれたことから、県としては、MOX燃料加工施設に係る立地協力要請の検討を再開することといたしました。

検討を進めるにあたりましては、これまでの間の新たな知見等を加味する必要があったことから、安全性チェック・検討会として、品質保証体制等について追加的に検討していただいたところ、本年2月1日には県に対して報告があり、この検討結果については再度県議会議員、市町村長等に説明しご意見を伺ったほか、県内6地区で県民説明会を開催してまいりました。

私は、MOX燃料加工施設については、昭和59年の原子燃料サイクル施設に係る立地協力

要請外の施設であり、当時、県内の各界、各層からご意見を聴取した経緯があることから、県民の皆様のご意見を知事である私が直接伺う場として、本日、ご意見を聴く会を開催することとしたところであります。

県といたしましては、平成13年8月に日本原燃株式会社からMOX燃料加工施設に係る立地協力要請があつて以来、原子力を巡る様々な動きがあつた中で、安全確保を第一義に慎重の上にも慎重に手順を踏んでまいってきたところでありますが、これまでの経緯、ならびに本日の皆様の方のご意見をもとに総合判断してまいりたいと思います。

本日は、皆様方には忌憚のないご意見をお願いし、ご挨拶といたします。

本日はご出席賜わり、誠にありがとうございました。

【司会】

ここで、県側の出席者をご紹介申し上げます。

はじめに、ただ今ご挨拶申し上げました三村知事でございます。

関商工労働部長でございます。

高坂環境生活部長でございます。

天童特別対策局長でございます。

そのほかに、MOX燃料加工施設に係る安全性チェック・検討会の主査を務めていただきました、大桃主査でございます。

同じく小山委員でございます。

それでは早速、意見発表に移らせていただきます。

ここからの進行は、コーディネーターをお願いしております、中村政雄様に進行役をお願いしたいと思います。

どうぞよろしく願い申し上げます。

【コーディネーター 中村 政雄】

中村政雄でございます。

本日、進行役をさせていただきます。

座って失礼いたします。

私は、昭和30年代から新聞記者といたしまして、日本だけではなく世界のエネルギー事情、原子力事情を取材してまいりました。六ヶ所村にあります原子燃料サイクル事業の状況につきましても、度々六ヶ所村を訪れまして取材をいたしました。

本日は、MOX燃料加工施設の立地につきまして、三村知事が直接県民の皆様方からご意見を伺うという重要な場面の司会役を仰せつかりました。本日、お集まりの皆様方のご協力を得て、この大役を果たしてまいりたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

早速ご意見の発表に入らせていただきます。本日の意見発表者は、全員で31名でございます。午後の5時まで4時間足らずの時間でございますが、非常に限られた時間でございます。従いまして、今、県の司会の方からお話がございましたように、発表時間は5分ということ

にさせていただきたいと思えます。

前半と後半に分けまして、途中で休憩が入ります。予め抽選で発表の順番は決めさせていただいているのでありますので、その順番に従ってご意見を述べていただきまして、前半が終わった所と後半が終わった時に三村知事から簡単なコメントをいただこうと思っております。ご意見をいただく会でございますので、ご意見をいただくだけで本当はよろしいのかと存じますが、折角知事もお見えになっておりますし、何かご意見をいただいた方が良く思えますので、簡単なコメントをいただくということになっております。

それでは、最初に発表してくださる方は、青森県畜産農業協同組合連合会代表理事会長の長畑良雄さんでございます。長畑さん、お願いをいたします。

【青森県畜産農業協同組合連合会代表理事会長 長畑良雄】

県畜連の長畑でございます。

今日はこのような物々しいことを予想だにしないでトップバッターに立つわけでございますが、私は畜産ということで一言意見を述べさせていただきます。

我が県、青森県は、これまで畜産は全国でも最下位に位置しておりました。それが、平成11年の県の種牛、第一花国がデビューして、今、全国から畜産の価格が高騰して脚光を浴びております。お陰様で、昨年12か月の子牛市場が1か月に1回ないし2回開かれているわけでございますが、全国の子牛価格がその12か月の5か月間が全国最高位の値段がついております。これも第一花国が全国各地での共励会、品評会で好成績を得ておる結果でございます。これに対して、県の皆さんには感謝を申し上げます。

そういうことで、今、毎回の七戸にあります家畜市場には、北海道から九州までの購買者が沢山お出でになっております。今、最下位にあった畜産が、今、全国屈指の青森県ということになったわけでございます。

それで今、MOX燃料、核燃の話になりますが、あの地域でも、六ヶ所の梅木さんという方が、全国草地協会というのがございまして、あのヤマセの地帯であって、草地を十分に活用し、酪農経営が素晴らしいということで、全国表彰を受けております。そういう、今、原燃があるあの地域にあっても、それだけ立派に畜産を経営していることもございます。そうして先月ですが、東通村では、行政をあげて和牛のPRをしようということで、試食会も開きました。これには、500人くらいの試食者が訪れて好評を博しております。

こういうような中で、今、皆さんもご承知のとおり、平成13年にはBSEが発生して、これは政府の失政でございます。それがために、畜産が一時本当に危惧されました。それが政府、そして畜産農家、関係者のおかげで、一丸となって取り組んだ関係、今は表示の安全、そして価格もその当時に戻っております。このように、事故が起きてから対策するのがこれまでのようでございます。私は、MOX燃料、詳しい内容は分かりませんが、いずれにしても、やる時は安全ですと。私もあの資料を見ました。それだったら何も心配することはないんですが、やはり事故が起きれば、設計のミスとか、下請けがうんぬんとか、溶接がうんぬんとか。これがいつものパターンでございます。これはあってはならないわけでございます。

ですから、私も一つの代表としていつも言われていることは、これは子どもの教育にもそ

うですが、ABC教育をしっかりしなさいということ。これは何のことかと思ったら、Aは当たり前のことをぼやっとしていないでしっかりやれということだそうです。ですから、基本をしっかりしてやっていただきたい。そういうことが畜産にもなります。折角、畜産が全国一位の畜産県になったわけですので、これに水を差すような施設にだけはしていただかないと思います。

それに、核燃のサイクル立地基本協定の中には、地域の振興が盛られているはずでございます。この振興計画をみましても、畜産にももう少し配慮していただきたいという願いでございますので、甚だ時間の制約もありまして、まとまりもありませんが、思い付きで話しますが、とにかく安全が第一です。今、トレーサビリティが更に叫ばれております。農畜産物はそれに徹底してやっているわけですので、折角、畜産がこれまできたことに水を差すような施設にだけはしていただきたくない、こう思っている意見でございます。

とりまとめのない意見になりましたが、これで終わります。

【コーディネーター】

ただ今は、畜産に配慮して、安全第一でやって欲しいという、長畑さんのご意見でございました。

続きまして、青森県消費者協会副会長の竹島勝昭さんでございます。

お願いします。

【青森県消費者協会副会長 竹島勝昭】

それでは、早速、消費者の視点から意見を述べさせていただきます。

青森県は、原子力船“むつ”から端を発し、六ヶ所再処理工場の水漏れ事故、再課題となっている使用済み核燃料は、1,304トンにも達し、その最終処分も不透明など、原子力行政に関する安全性の信頼が問われているところであります。

加えて、むつ市の原子力廃棄物一時貯蔵施設、東通村原発、この度のMOX燃料工場の施設と原子力行政に関わっての諸問題が山積しています。日本における原子力施設の各所で、数々の事故が発生し、その信頼性を失墜し、国民こそって安全性を危惧しているのが現状です。

このような実態を踏まえて、この度のウラン・プルトニウム・混合酸化物・燃料加工施設に限定し、所見を述べたいと思います。

去る1月17日、続いて1月31日と2回にわたってMOX施設に関わる安全性チェック等について検討したようですが、その確証試験の結果も公表されています。このプルトニウムは、ウランに比べて放射能、放射線が強いという特徴から、特に安全性が問われているところです。今までの各施設の放射線漏れや施設のトラブルから、果たして事業者、つまり原燃と下請負い業者の連携や意思疎通がしっかりなされているかが疑問です。

次に、加工中はもちろん、慣行時の冷静な検査やチェックが施されているかということです。

3点目は、従事している全職員、原子力に関する危機意識が欠如していないかということ

です。作業員にマンネリ化があってはならないことなど、全て人為的ミスがトラブルに起因し、今後予想される事故について、多岐にわたり徹底的に究明し、何重にもチェック体制を整えて、安全性を確保し、地域住民の信頼に応えるよう要望するものです。

最近では、先ほど三村知事からもご挨拶の中でありましたように、東京電力がむつ市に計画している使用済み核燃料中間貯蔵施設の安全性を協議してきたチェック・検討会が三村知事を訪れ、これまでの検討を踏まえ、施設の安全性は十分確保されるとの結論に達しました、と報告しましたが、そこで留めることがあってはならないと思います。このことに対してどのような観点から、どんな検討で安全性が十分確保されると言えるのか、詳細にわたって追求すべきであり、これらの問題解決をしないままであれば、強い疑念を感じる所です。

こんなことから、何よりも安全性を重視する原子力行政を望み、どんな小さいトラブルでも公表し、相互に信頼関係を保たれる原子力開発を希望し、消費者を代表しての意見といたします。

ありがとうございました。

【コーディネーター】

竹島さん、どうもありがとうございました。

安全性を重視して、マンネリに陥らないよう、県民の信頼を裏切るなというご意見でございました。

次は一般公募の方で、農業の唖清悦さんです。

【農業（一般公募）唖清悦】

県の公社、財団の不透明な理事長選考、そして核燃の問題にも非常に詳しい唖さそう清悦です。

エネルギーの96%を海外に依存する日本にとって、エネルギー政策こと最も重要であり、電気はエネルギーの一部にすぎず、原子力はさらにその電気の発電手段の一つにすぎません。そして更に、原子力発電システムの1パーツにすぎない個々の施設のみを取り上げて、一地域の金銭的損得勘定のみで判断するべきではなく、まずはこの国に最も適した原子力政策がどうあるべきかについて議論するべきだと思います。

推進派と普通に議論しても全く勝負にならないので、今日は特別ハンディをつけて私も中間貯蔵施設、MOX燃料加工施設などは国策として、絶対に必要だとしましょう。

すると問題は、どこに作るべきかということになりますが、石原知事が、原発は東京湾に作れば良いというだけあって、私も東京が最も相応しいと思います。電気の大消費地である東京に、原子力発電に必要な全ての施設をシステムとして1ヶ所にまとめて作るのが、極めて効率的です。そして、東京電力の古くなって使っていない火力発電所を解体し、新たな原発をそこに作るべきです。放射能が人体に与える影響もないし、いかなる地震にも耐えるように設計してあるし、二重、三重の安全対策で、絶対に事故は起こさないつもりで操業するそうです。

送電線、鉄塔、用地買収、戦禍補償、風評被害対策、漁業保障などのコスト削減効果は非

常に大きく、特に輸送時の事故が心配な海上輸送がなくなるのは、実に魅力的です。ですから、推進派の皆さんも、そのことをよく理解して、今後新たに建設する原発、中間貯蔵施設、MOX燃料加工施設、第二再処理工場などは、国全体の利益のために全て東京に作って下さい、と私と一緒に小泉総理や石原知事に言ってあげることこそ、国民が国策に協力する真の姿ではないかと思えます。

そして、格好をつけた間際らしい言い方はやめて、お金をもっと沢山ください、とストレートに訴えていけば良いと思えます。

最終処分場については、本来であれば、各都道府県それぞれの責任として、電気の使用量に応じて引き受けるべきですが、最終処分場は1ヶ所しか作らないそうですから、電気使用量の最も多い東京に譲らざるを得ないと思えます。

ですから、他に場所を探す暇があったら、東京のいかなる場所にでも最終処分場を作れるように、今からそれに必要な技術開発に着手するのが得策だと思います。

そして、国策の最高責任者である総理大臣が、このようなビジョンを国民に示し、理解を得ることこそ、本来あるべき姿だと思いますので、知事から小泉総理に是非教えてあげてください。

昨日の十和田市での三村知事の講演、攻めの農業、私も一番後ろで聞いておりました。知事が考える地域農業の将来ビジョン、個々の農業政策など、完璧、百点満点の出来でした。一時間講演する間、一度も水をとらず、熱く語る知事の姿を見て、これが本当の三村申吾ではないのだろうかと思いました。それゆえに、私と全く同じ農業ビジョンを持つ知事が、それを台無しにしかねないアホな政治家と官僚が考えたような原子力政策に、従順に協力する姿は同じ青森県民として、非常に情け無く、また残念でなりません。

知事が自分を偽って、県民の非難を浴びてまでも、国の言いなりにならざるを得ない状況を作り出している原因が何なのか。知事に代わって私がはっきりと言ってあげましょう。

知事は青森県が核のゴミ捨て場にされるということにも気付かない、ボヤッとした青森県民から選ばれた代表ですが、何よりもお金さえくっついてくる箱物であれば、放射能であろうが何であろうが構わない。とにかく、自分達に利益を誘導してくれば良い。そうでなければ、選挙の時に応援しない、という人、におおす人、脅す人の圧力によって本心と異なる判断をせざるを得ない状況にあるのではないですか。

もしかしたら、今日、皆の知っている前で、MOX燃料加工施設は青森県の発展のために必要だ、と恥かしいとも思わず力説するようなおめでたい人が一人や二人はいるのではないかと楽しみにしてやってきました。

以上で終わります。

【コーディネーター】

ありがとうございました。

MOX燃料加工施設だけではなく、これから出来る原子力の施設は、電力の大消費地である東京に、青森ではなく東京に作れというご意見でございました。

次は、核燃料廃棄物搬入阻止実行委員会共同代表の平野良一さんです。

【核燃料廃棄物搬入阻止実行委員会共同代表 平野良一】

核燃料廃棄物搬入阻止実行委員会の平野です。

私は、MOX燃料加工施設は、立地すべきでないという理由をの申し述べたいと思います。時間が限られておりますので、箇条書き的に申し上げざるを得ないことをお許しいただきたいと思います。

まず第1番に、MOXというものは、再処理をやった後に出来るプルトニウムを利用するのがMOXですから、その利用するプルサーマルという計画が、現時点ではまだ何も実際に機能するようになっていない状況にある。従って、必要性がまだ確立していない段階にある。

2つ目には、そのMOXに再処理を行った後に出るプルトニウム、ウランを加工する技術について、大桃さんをはじめ、チェック・検討会で報告書を出していただきましたが、その中でも申し述べておりますように、まだ現物を使つての実証試験には入っていないわけであり、試験開発途上である。完成された技術ではないということが2つ目であります。

それから、3つ目は、再処理をやることによって、高レベルの廃棄物の量が少なくなるというのが謳い文句なのですが、現実には、仮にMOXをはじめ、プルサーマルをやった後に、再び使用済燃料が出てまいります。そうなりますと、軽水炉でワンスルー、いわゆるいっぺんだけ使用済燃料になったものを直接処分するよりは、一度、それを再処理して、プルサーマルを実施した後で出てくる使用済み燃料の始末の方が、より面倒になり、分量的にも放射性廃棄物を増やすだけであるというのが3つ目であります。

第4に、日本原燃の体質であります。知事も現在、確か、アクティブ試験に対する事務的な手続きは凍結されて、まだ解除されていないと思っております。先だつての原燃の品質保証体制に疑義を生ずるかのような、幾つかのトラブルがありました。それだけではなく、今日もまだそれが、兒島社長が頭を下げていながらも、2月の21日に使用済燃料受入れプールで、使用済燃料の輸送容器を運ぶ台車のケーブルにトラブルが生じました。それを解決するという形にしていたのに、3月に入って18日に全く同じトラブルが起きております。品質保証システムを改善してまいりますということ、常日頃、口では言い、文書でも出すんですが、実際が伴っておりません。

従って、私は何よりも日本原燃そのものの品質保証システムがはっきり機能しているということが確認されるまでは、次の段階に進む一切の作業を凍結するべきということを申し上げたいと思います。

そして、5つ目に、日本原燃そのものが経営的にも、現在、確か2004年度上半期の決算状況では、650億円という欠損を見出しております。その多くは何かといえば、きっちりした実証を伴っていないウラン濃縮などによって、大きな欠損処理をせざるを得なかったという。そういう状況にあるわけですから。経営体質が伴っていない会社も、ただ単に、再処理をやることによって、経営が改善されるかといえば、今の状況では、むしろ経営をより悪化させる始末になるのではないかと。

そして最後に、国がいろんな場でお墨付きを与えてきましたが、今回、日本原燃が犯したガラス固化施設の崩壊熱除去解析問題での安全審査上、大きなミスも国も犯していたのに、

それに対するはっきりとした国民に対する詫びと説明責任を果たしていない、こういう状況では、私共、国に対しても信頼を持つわけにはいかない。こういう事態でありますので、以上申し述べたような理由によりまして、はっきりウラン試験がどのような成果を上げ、その事によって、アクティブ試験に進め、さらには再処理が可能かどうかという時点で、改めてMOX施設についても検討を開始しても、時間的に遅くはないと考えます。

よろしくご配慮のほどお願い申し上げます。

【コーディネーター】

平野さん、どうもありがとうございました。

反対というご意見でございました。

ちょっと時間を超過されましたが、これから後の方は、できるだけ5分の時間をお守りいただきしたいと思います。

と申しますのは、時間が限られているからであります。

次は、青森県社会福祉協議会会長の良原せつさん、お願いします。

【青森県社会福祉協議会会長 良原せつ】

良原でございます。

MOX燃料加工施設の立地についてご意見を申し上げます。

世界的なエネルギー資源の逼迫や、地球温暖化の問題、あるいは人類社会の持続ある発展などの問題を考えますと、原子力発電とその核燃サイクルの維持は今後もお必要な社会的な仕組みと思われます。これは、現段階でそう思います。

六ヶ所村へのMOX燃料加工施設の立地については、安全性について一応執行できるものがあると思われまこと。さらには、今後の科学的、技術的な一層の研究が行われ、安全対策の維持、向上が図られるものと思われまこと。一抹の不安もないわけではありませんが、これまでの再処理工場の立地等の経緯を考えれば、やもう得ない施策として、これを容認せざるを得ないものかと現段階では考えます。

立地にあたっては、地域住民はもとより、従業員の生命、身体への危険、かつ重大な事故が万が一にも発生することのないように、十重、二十重への事故防御の安全策を講じ、その維持向上に最大の努力、工夫をしていただきたいと思います。

以上でございます。

【コーディネーター】

ありがとうございました。

今度は大変短いご意見でございました。やもう得ず、承認をするというご意見でございました。

ありがとうございました。

次は一般公募の方で、元小学校長の工藤正義さんでございます。

【元小学校長（一般公募）工藤正義】

工藤です。よろしくお願いします。

65歳を過ぎた老人のたわごととして聞いていただければあり難いと思います。

よく、年寄りの取り越し苦労と私言われているのが、地球の温暖化の話です。よくテレビで、CO₂が100年で1.3倍に増えたとか。氷河が溶けている画面を見ますと、何か恐ろしいものが横切るわけです。もう既に、島が海に消えていると。そういうものを見ますと、何か私も地球に生きている一人として、何かしなければならぬのかなということを感じます。

けども、実際は私も犯人であります。今日も自家用でまいりました。ガスを出しているわけです。それから、毎日電気、ガス、やる事がないのでテレビばかり見えています。そういうことで、滞ることなく私は毎日CO₂を出している。

考えてみますと、私の周りでCO₂を出さないで作られたものは、一体数えることが出来るのかということです。仮に、水道の水にしても、出る時は水なんです、出すまでの過程では電気を使ったりしているわけです。そういうことで、何か出来ないかということで、出来ていることはせいぜい生ゴミを出さないとか、ゴミのリサイクル。生ゴミはお陰様で11年間一切出しておりません。発酵させて、菜園に使っております。美味しいです。

それから、アルミ缶、ペットボトル、ガラス缶、これは100%リサイクルですね。やれることは全部やってみよう。そしたらCO₂は私にも少しは協力できるのではないかと思います。

今年の冬、暖冬だと聞いたんですが、全く嘘でありました。今年度の灯油を使った分、全部清算してみました。私は家族二人、孫二人くらいいるんですが、今年1年、2,203リッター使いました。昨年度は2,206リッターで、3リッターの節約したということになります。ところが、お金の方が逆に8.3%儲けていました。灯油の値上がりですね。

ということで、結果的には、どうなったんでしょう。かなりCO₂は一杯出したし、お金も一杯出した。来年はもっと節約しようと思っていますが、中国の工業化、中国がどうやら石油を輸入する国になっているということで、化石燃料は品薄の値が高いものになるのかなということをお心配しております。高齢者、65歳の50万円の税金の何とかも、来年からはなくなりますので、大変厳しい年金暮らしになるのかなと。そのへん、知事さん頭においていただければ。

2,200リッターというもの、そこらにある資料をいろいろ見てみたら、1gのウランとプルトニウムの核分裂した時のエネルギーと同じだということ。1円玉1個で私の家は全部暖かさが保たれるという計算になるのかなと思います。

そういうふうに、効率的なエネルギーを取れるのであれば、私はMOXの方に賛成しても良い。ただ、皆さんもおっしゃるとおり、非常にリスクを背負う場面もあるわけです。その点については、最大の会社の経営者の方々は、理念をもって、人材育成、または社内の研修、工場管理、運営、チェック機能の完全実施等々、社員一同、または携わった、釘一本打った職人さんといえますか、技術者といえますか、その人達も同じレベルで責任をもって、会社経営に参画していただきたいと思えます。

それでも、最高の技術、または最高の資材、最高の技術者で作った工場でも完璧ではない

と思います。やがて疲労し劣化し腐敗します。機械も故障します。また人間も完璧ではないと思います。ミスという、簡単なミスという武器で破壊や破損、その他いろんなことを選択するようなことがあり得ると思います。

どうか、完全な安全を最大の売り物として、地域住民には安心と信頼と豊かさを保証していただきたいと思います。

以上で終わります。ありがとうございました。

【コーディネーター】

どうもありがとうございました。

地球温暖化の原因物質である、CO₂を出す者の一人として、MOXに賛成をすると。その代わりしっかりやって欲しいというご意見でございました。

次はむつ青年会議所理事長の館岡清貴さん、お願いします。

【むつ青年会議所理事長 館岡清貴】

むつ青年会議所の館岡と申します。よろしくお願いします。

本日は、MOX燃料の加工施設に関する意見ということで、まず加工施設に関する意見を述べさせていただきます。

まず、最近では、プルサーマルという言葉がめっきり聞こえなくなりましたが、前日の新聞でも取り上げていましたように、県でもMOX燃料に承認していただけるということで、今までの中断した分を取り返すために、そちらの方に全力を挙げて取り組んでいただきたいと思います。

そして、2010年、新幹線が青森まで開業というふうに計画されていますが、こちらのMOX燃料が2009年ということで、新幹線の建設に比べたいまいち関心度が低いのではないかと感じられます。

私自身、今日はMOX燃料施設ということですが、この施設自体に関する中身が、いまいち分からなくて、例えば、この施設というのは、年間のエネルギー量が先ほどの冊子にもついておりましたが、どれくらいの、青森県の4、5年分と書いてありますが、年間でどれくらいの生産量を賄いまして、それを在庫として保管出来るものか、また、そのペレットというものを燃料電池棒に加えて、各所で使用した場合に、その燃料電池棒というのはまた再利用できるものなのか。それはそのまま廃棄処分できるものか。率直な燃料の生産性について、詳しくいろいろと説明していただきたいと思います。

そして、青年会議所の方では、真価と継承のバランス型、信頼社会という、今年度は理念に基づいておりますが、先ほど知事さんもおっしゃっているように、59年あたりからいろいろと計画が進んできてとありますが、やはりエネルギーに関しましては、それぞれ年を重ねるごとに、環境とかいろいろな部分でも段々変化してきますので、それに基づいて、柔軟にいろいろ対処していただきたいと思います。

そして、昨年以来、名前が上がっております、やはり我々地域住民としても、コンプライアンスということを重視していただきまして、いろんなことに関してオープンにしてい

いて、是非、いろいろコンプライアンスを重視していただきたいと思います。

そして、一番信頼していただける環境に整えていただきます。何分、どうしてもこういう状況では、混沌としては皆さんの疑念をいただきますので、是非、県をはじめ、信頼できる社会の創造を目指していただきます。

そしてまた、こちらの方の資料では、安全性を第一に優先していただきまして、また、安全と謳っておりますが、例えば、万が一の災害が起きた時、先日の新潟県中越地震におきましては、新幹線は絶対安全といわれていましたが、脱線という形になりました。このMOX燃料、原燃のサイクルも確かに安全ということで私も認識をしておりますが、万が一の災害の時の本部長が、例えば、知事さんであるのか、内閣総理大臣になるのか、そういう災害の時のきちんとした体制を、ないものに越したことはありませんが、しっかり作っていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

【コーディネーター】

館岡さん、ありがとうございました。

燃料再処理出来るという観点から賛成だというご意見でした。地域の信頼を裏切らないようにやってくれというご意見でございます。

次は、核燃料サイクル施設立地反対連絡会議の高知よしおさんです。

【反核燃サイクル施設立地反対連絡会議 河内淑郎】

三村知事をはじめ、関係者の方々が、このような会を設けられたそのご尽力とご配慮に対しまして、まず心から敬意と謝意を表したいと思います。

MOX燃料の加工施設について意見を述べるにあたりましては、核燃料サイクル政策の問題を抜きにしては語れません。この点をまずご理解願いたいと思います。

日本で実施されてきた原子力開発をトイレ無きマンションに例えた話は大変事の本質をついており、今日でも通用していると思います。はじめに、原発核燃の導入ありきでスタートさせて、問題が発生するとその場しのぎの対応ですませ、問題の根本的な解決はいつも先送りされてきました。原子力船むつがその典型だと思います。

この5年間を振り返りまして、東海村のJCO臨界事故、東京電力の原発損傷隠し、関西電力美浜原発蒸気噴出事故など、人命に関わる重大事故が繰り返し発生しましたが、問題の根本的な解決は先送りされてまいりました。

六ヶ所の再処理工場でも、プールの水漏れ、ガラス固化体貯蔵施設の設計ミス、前処理建屋での硝酸液漏れ、生成建屋での水酸化ナトリウム漏れなどと続いて、本格操業の前からこの調子では、ことあるごとに安全性が第一にといわれても、本当に大丈夫なのか、欠陥工場ではないのかと、多くの県民が、不安や疑いの気持ちを持つのは当然だと思います。事故やトラブルが何故繰り返されるのか、私共の認識では、日本の原子力開発がその出発点から、基礎研究や安全性優先の技術構築のために、自力による積み重ねを十分進めることなく、実証済みということで海外での先進国の技術開発に安易に依存してきた。そうした事業を進め

てきたことが、今日繰り返される事故やトラブルの発生の一つの根本原因になっていると思います。

また、シビアアクシデント、過酷事故などは発生しないという過信や思い込みが、原子力産業界に依然として根強くある。このことも、事故発生の原因だと思っています。

最近、関西電力より、昨年の8月9日に発生しました美浜原発事故について調査、報告書が出ましたけれども、今回の最終報告書では、関西電力や三菱重工の責任は問われてはおりません。しかし、関西電力が国に提出しました、定期安全レビュー報告書の中では、精査をしたが問題になる原肉はなかったと。事実と異なる記載をしたことについて、国が事故の発生前に見抜くことが出来ず、妥当としてきたこと。このことについての国の責任は一切問われておりません。雪印や三菱ふそうなどの事例に見られるように、今日産業界全体に経済効率を過度に追求するあまり、安全性が軽視される風潮が蔓延しています。小手先の対応で事故を防ぐことは、極めて困難な状況にあると判断すべきではないでしょうか。

私は、県が引き続き国に対して、全力で一日も早く、行政から独立した権限のある原子力規制機関の設置を求めていくように、心から切望するものでございます。

MOX燃料加工施設については、安全性に問題なしとした上で、核燃事業推進の一貫として立地の容認を進めるとというのが県の進め方であるというふうに認識しておりますけれども、現在、核燃料サイクル政策が行詰っている中で、MOX燃料加工施設の立地、検討の必要性はないと思います。やる必要のないものを安全であるからといってやる必要はありません。プルサーマル計画一つとっても、どこの原発でいつどのくらいのプルトニウムを利用するのか。使用済核燃料のMOX燃料の処理処分はどのようなのか、明らかになっていません。

福島県の知事に、プルサーマル計画の実施を拒否された東京電力が、むつ市に中間貯蔵の建設を急ぐこと自体、この核燃料政策の破綻を象徴している出来事だと思います。全量再処理とはいいますが、第2再処理工場は2010年からの検討開始。そして処理に必要な施設という、その場しのぎの対応策があいも変わらず続けられております。再処理推進の本当の狙いは、使用済核燃料の搬出先を確保して、原発運転の継続を保証することにあるのではないのでしょうか。

国策としての核燃料サイクル維持の立場に固執する限りは、県民の安全第一という立場と両立させることは極めて難しいと思います。アクティブ試験については、是非中止を求めます。そうして、ガラス固化体はもちろん、海外から返還される低レベル放射性廃棄物の最終処分地にさせないとの約束を国から知事が文書で取りつけられることを強く要請いたしました。発言といたします。

ありがとうございました。

【コーディネーター】

高知さん、ありがとうございました。

廃棄物処理、処分の行方がはっきりしていない現段階においては反対である、というご意見でございました。

次は一般公募の主婦の高橋のり子さんです。

【主婦（一般公募）高橋典子】

高橋です、よろしくお願いいたします。

このような場を持つということは、県民全体に意見を広く聴いて、協力して欲しいという気持ちの表れではないでしょうか。良いことだと思いますので、私も意見を述べさせてもらいたいと思って出席させていただきました。

日本は、資源が乏しいですね。もし、将来地球規模でエネルギー資源の枯渇のことを考えると、確実なエネルギー源を確保する、原子力燃料サイクルを確立することは重要なことだと思っております。今、原子力は特にサイクルはいろいろな厳しい状態だと思っておりますが、将来の子ども達、子孫がエネルギーに困ることのないよう、サイクルの確立を目指して欲しいということと、MOX燃料工場が操業して初めて核燃料サイクル事業を誘致した意義があるのではないかと思います。しっかり完成させて、安全操業に向けて努力してもらいたい。

それに今、地球温暖化が言われている中、このような事業は不可欠ですので、頑張ってください。

それから、またこの問題は本県だけではなく、国民全てが次世代エネルギーについて認識し、協力し、理解してもらわなくてはならないと私は思うのです。

以上です。

【コーディネーター】

高橋さん、ありがとうございました。

核燃料サイクルの確立は、子孫にエネルギーの不足で困ることがないようにするために必要である、というご意見でございました。

次は、一般公募の農業の苫米地やす子さんです。

【農業（一般公募）苫米地ヤス子】

三村申吾知事が、よく口にする言葉、県民の安心と安全。私もこの言葉が大好きです。人間の生きるもとは命、その命を支えるのが食べ物。私達日本人の食べ物の基本は、米と野菜です。そう思って、私は少しでも安心な暮らしをと、無農薬での米と野菜づくりに取り組んでいます。

私にも可愛い孫がいます。この豊かな青森が、いつまでも安心して安全であってくれば良いと思う、このお婆ちゃんにとって、たった一つの心配が六ヶ所村の再処理工場です。あれさえ無ければ、同じように心配している農業者達数人と、十和田、八戸、青森、弘前の街角で、市民や観光客の声を聞きました。ギラギラ暑い今年の夏、250人ほどの消費者としての声でしたが、再処理工場が稼動すれば、青森県産品のイメージは下がる、落ちるとの意見が、何と8割を超えました。心をこめた米が、汗水たらして作った野菜が、評判が落ちるよと言われたこの気持ち、三村さん、この虚しさ分かりますか？

放射能の心配はないと原燃の社長さんは言い続けてきました。原燃を信じると三村知事も言い続けてきました。でも、一番大事なのは消費者の声ではないでしょうか。日本の消費者

は、果たして原子力施設を安全で安心だと思っているのでしょうか。実際の原子力施設が安心で安全であるかどうか、それも重要です。でも、消費者が安心で安全だと思っているかどうか、もっともっと重要ではありませんか。

仮に、仮にですよ、三村さん。消費者の多くが原子力施設は怖いものだと思っているのなら、原子力施設の近くで採れる農産物を好んで食べるでしょうか。十和田の長いも、天間林のにんにく、東北町の人参、六ヶ所村の牛乳、津軽のりんご、青森県産の米の人気は上がりますか。魚介類はどうでしょう。八戸のイカ、陸奥湾のホタテやナマコ、小川原湖のしじみ、消費者の人気は上がりますか。攻めの農業、攻めの漁業、青森ブランドを売り出すことには大賛成です。三村知事が、都会のスーパーの店頭で前髪をハラッとさせながら、丸い笑顔を見せて一生懸命に売り込んでいる姿には頭が下がります。でも、肝心なことを避けているのではないのでしょうか。

原子力施設が動いても、買ってくれますか？と、この一言を言ってくれますか。それとも、わざわざ寝た子を起こすような馬鹿を言うもんか、という作戦ですか。

皆さんも、原子力施設が動いても買ってくれますか？と周りに聴いてみてください。確かに、青森県は貧乏です。経済も産業も日本のドツペかもしれません。でも、自然の豊かさと心の優しさは日本一です。私は、青森に生まれて良かった。青森で暮らして良かったと思っています。知り合いの農業青年は、子孫に美田を残そうといっています。子どもや孫達に安心して住んでもらえる、安全で安心な青森県であってほしいと私は思いますけど、三村さんは如何でしょう。

今日は、県民のいろんな立場の人が集まっています。農業や漁業の団体の代表の方は、きっと農業者や漁業者の不安や希望を聞き集めてきたことでしょう。婦人会とか、母親の会の代表の方も、それぞれの会員の気持ちを代弁するものですから、短期間で意見をまとめるのにご苦労されたことでしょう。

三村さん、私は反対でも賛成でもなく、安心して農業を続けたいだけなんです。私のお客さんが、「苦米地さん、何も心配しなくていいよ。今まで通り買うから」と言ってくれるのであればそれでいいんです。でも、既に都会のお客さんのうち4人から「もう買わないよ」と言われたのです。

知事になる前のある勉強会のこと、三村さんは、水を生かし、川を大事にし、環境に優しい故郷を作りたいと目を輝かせていました。何と素晴らしい人なんだろうと感激しました。こんな人が知事になってくれたらと、そう思ってファンになりました。でも今の三村さんは別人のようです。まさか偽者ではないでしょうけども、私の好きな三村さんではありません。

いろいろすみません。三村さん、百石は十和田とご近所です。一度、私の田んぼに来てください。放し飼いのニワトリの卵を御馳走します。一緒に草取りをしましょう。

すみません。ありがとうございました。

【コーディネーター】

苦米地さん、ありがとうございました。

核施設ができると、県産の水産物、農産物の評判が落ちるといふご心配から反対というご

意見でした。

次は、一般公募の自営業の福山初枝さんお願いします。

【自営業（一般公募）福山初枝】

どうも、町で婦人会活動をしておる福山でございます。

早速始めたいと思います。

考えますと、今から約30年といいますと、私も随分若かったんですが、あの大騒ぎしたオイルショックの時でございます。そういうことで、私達婦人層もエネルギーに対して、ある程度無関心ではいられないんじゃないかと、そういう意味で、このエネルギーに対する勉強会を開くことを決定したわけです。

それからいろんな説明会、研修会、施設などにも行き、研修会を続けて、今日に至っております。

そういうことで、先般も五所川原でやりました説明会にも、多数の会員を連れて参加させていただきました。施設見学に行きましても、やはり説明会に参加しましても、いろんなことを説明されます。あまり難しくて居眠りしなければならぬんじゃないかと、そういう時もあります。回を重ねる度に、いろいろ頭の中で整理し勉強し、何か推進の方に向かっていきました。そして、現在に至っております。

このエネルギーは、日本では絶対必要な施設ではないかと、そう感じるようになりました。しかし、一方におきまして、事業が進むにつれて新聞等で、いろいろなトラブルが発生し、報道する度に、やはり私達も一抹の不安を覚えます。それは、事実でございます。

また、一時は下火となりました農産物に対する風評被害などにも、アンケートなどを街頭でやりまして、逆に風評被害をあおるような現在になっているのではないかと、そう感じてございます。

前回の五所川原市での説明会にも、青森県の求人倍率が低いのは、この施設があるからだという意見の方もありました。でも、私はそれはそうなのかな？という疑問詞を持って帰りました。

そういうことで、人間はやはりいろんな考えがあってしかりでございます。いろんな意見もあって良いと思います。でも、ただ一つ共通なことは、安心して安全で優しい環境づくりが必要だということは、皆さん共通の願いではないでしょうか。この日本のエネルギー事情を考える時、原子力発電や原子力サイクル施設は、絶対必要ではないかと、私事に考えております。

この大切なエネルギーを子どもあるいは孫までも伝えるのが、私達現在の大人の使命ではないかと感ずるようになりました。安全には絶対がないという言葉もよく耳にします。でも、安全を最大限確保することは絶対できるはずでございます。

ある研修会に行きましたら、やはりただの水でさえ操作を誤ると爆発事故が起こる。そういうものだということで、やはり技術をしっかり検査体制を整え、そして改善すべき所は絶対改善する。そして世界に誇れる技術を確立することこそ、この施設のためには絶対必要だと考えるようになりました。

先般、東奥日報に出ておりました、エネルギーを学んだ高校生のお話が載っておりました。その中で、一人の高校生がこんなことを言っていました。「日本のマスメディアは、何か事故が起こる度に報道し、国民は聞く度にまた原子力の安全性に不信感、不安感がつきます。国際的な評価とすれば、最低のランクにしか及ばない小さな事故ですら、日本は危険だ、危険だと大騒ぎします。もっと勉強すれば、原子力施設も良い方向にいかせるのではないか」という一節を見まして、子どもが私達の意識を跳び超えて成長しているのではないかと関心しました。

どうか、私達もこれから勉強します。そういうことで、何とか原燃の皆さん、またそれをチェックする機関、何とか私達に信頼できる施設にさせていただくことをお願いして終わります。

ありがとうございました。

【コーディネーター】

福山さん、ありがとうございました。

この施設は、日本で絶対に必要な施設であると。ただし、安全性には十二分の配慮をして信頼を裏切ってもらいたくないというご意見でございました。

次も一般公募の方で、町会の役員をしていらっしゃいます、角田むつみさんです。

【町会役員（一般公募）角田陸奥美】

私は、昭和も二桁始めの方の生まれですから、今から30年ほど前のオイルショック、この経験をしている者であります。

当時の石油にどっぷり浸かったエネルギー政策は、もう転換すべきとのことから、代替エネルギーの推進と原子燃料サイクルの必要性が検討されました。日本原燃によるサイクル事業が、ここまで進められてきたものと認識しております。

もとより、エネルギー資源に乏しい我が国です。その殆どを輸入に依存しているわけですから、そこで最近の原油価格の高騰は、その30年ほど前のオイルショックの時代には、とても考えられない50ドルを超える時代になっているわけです。しかし、その割には皆さん、随分世の中静かじゃありませんか。当時、あのくらい騒いだ状況なんですよ。

ここに、過去の苦い経験から、脱石油ということで石炭、原子力、LNG等にその代役を求めてきた結果として、今日のエネルギーに占める割合は、石油が凡そ10%。これは、かつてのそれより20%ほど少なくなっていると思います。さらに、原子力が占める凡そ25%、このエネルギーが先ほど申し上げました原油高の、昔は考えられなかった50ドル時代。これにもなかなか国民は反応しない。こういう状況になっているのではないかと思うわけです。

私達は、私達の子どもの時代のことを考えると、そのためにも国の発展、あるいは国民の生活の安定に欠かすことのできない大切なエネルギーの相当の部分を自力で確保するための努力は、これは私達の責務と言って良いのではないのでしょうか。

このことから、原子力発電所から出された使用済み燃料を再処理して、これまで国内外において30年ほどの実績を積んでいるMOX燃料として再生を図り、再び原子力発電所で利

用していくことは、原子燃料リサイクルと環境問題に関する二酸化炭素の排出を抑制する観点からも、理に叶ったものであると思います。

しかし、一方においては、過去の様々な体験から、原子力はその扱い方によっては、非常に危険なものであるとの思いもあります。したがって、先般のように、使用済み燃料貯蔵プールの水漏れ事故や、設計ミス等が知らされた時は、非常に不安を覚えるところです。トラブルや危険性だけを大きく取り上げる報道のあり方にも、いろいろな思いはありますが、事業者に求められることは、与えられた事業の重要性をしっかりと認識し、何事に対しても安全第一に事業を進めるとともに、情報の公開に努め、県民に一つたりとも不安を与えないようにすることが大切です。

小さな出来事でも反省すべき点はしっかりと反省の姿勢を示していただき、常に品質の向上に取り組んでいただきたいとの願いを込めて私の意見といたします。

ありがとうございました。

【コーディネーター】

角田さん、ありがとうございました。

エネルギーの殆どを輸入している日本で、原油価格がバーレル50ドル代になっても安心していただけるのは、原子力のお陰だという観点から、賛成というご意見でございました。

次は、一般公募の方で、自営業の小笠原さとしさんです。

【自営業（一般公募）小笠原聡】

六ヶ所から参りました、小笠原と申します。

今日は、MOX燃料工場施設に関連して、私達県民の意見を述べさせていただけるということでしたので公募という形で応募させていただきました。

私は六ヶ所に暮らして今年で30年になります。今振り返りますと、その間の村の変貌ぶりは目覚しく、特にむつ小川原開発から始まり、石油備蓄基地を、そして日本原燃の立地へと続くこの四半世紀は驚くものがありました。

また、私達の世代が生きた時代は、まさに高度成長期にあった時代で、日本全体に勢いがある、いわば現在の日本の形が作れた時期であったと思います。その後、日本はオイルショックを経験し、国民全員が省エネルギーを意識するようになった時期もありましたが、バブル時代に入り、消費をするような時期を迎え、省エネルギーもまるで過去の出来事であったかのような時期を経て、いわゆるバブルの崩壊した現在に続くここ十数年は、環境問題や経済的な面から、省エネルギーが再び意識される時代になったと感じております。

世間では、食糧とエネルギーの問題は、国の安全保障の問題であり、重要な問題であると言われております。そしてそのことを否定する方はおられないだろうと思います。しかし、残念ながらその両者とも国内での受給率は非常に低い現状にあります。

またその一方で、エネルギーの消費量は様々な省エネの電気製品や低燃費の自動車が開発されているにも関わらず、民生や運輸部門でのエネルギーの消費は、ここ十数年で25%から30%も増加している現状もあります。

スイッチを押せば電気が当たり前のようにつく。停電はめったにない。生活の大部分は機械が済ませてくれる。そして食卓には、季節に関係なく様々な食べ物が並ぶ。このような生活が当たり前になり、誰も不思議に感じられることのないような時代になったという現実があります。もはや、私達の生活はエネルギーとは切り離せず、食糧一つ作りにしても、エネルギーを大量に消費する時代になったのだと思います。

しかし、エネルギーが無くなる時代が近づいているということ、私達はどれほど理解しているのでしょうか。理解している、していないに関わらず、その時が確実に近づいているということは事実です。

私達が生きている時代は、何とか乗りきれられるかもしれませんが、しかし、子どもの時代は、そしてその子どもの時代はどうなるのでしょうか。私達の世代は、便利な世の中に生き、それを享受しています。しかし、ともするとそれが当たり前となり、私達の生活を支えているエネルギーの置かれている現実には鈍感になっているのではないのでしょうか。

現在、原油価格は1バーレル60ドル近くになっているという報道がされていきました。そして、これらの傾向は今後も続くことといわれております。しかし、このような報道を耳にしても、それが私達の生活にどのような影響があるのか。将来の子ども達に、その世代にどのような影響があるのかを、身近なものとは感じ難い世の中となっております。

しかし、何もせずにいれば、そのことを身近なものと感じざるを得なくなる世の中が、近い将来に訪れる可能性があるということ、現実のものとして認識しておく必要があると思います。

六ヶ所村には、再処理工場のほか、石油備蓄基地、風力発電設備、また隣の東通村には、原子力発電所があるといったように、エネルギーを身近に感じられる環境にあります。残念ながら周囲に目を向けてみますと、必ずしも冷静な議論がされてはいないように思われます。

エネルギーの現実を直視し、将来を見据えた対応をしていくなれば、そのための一つの取り組みとして、原子力や再処理の選択は必要であると思います。

であるならば、安全に使うための取り組みを事業者はもちろん、国も県もそして地元もしっかりとやり、次の世代に繋げていくことが私達の世代に求められている姿勢だと思います。

再処理設備を迷惑設備だという方もおられます。何故、青森と言われる方もおります。しかし、エネルギーという我々の世代だけでなく、子ども達、そしてその子ども達の世代と、未来の世代に続く課題を解決するための一つの方策として、再処理という施設が青森にあるということを誇りに思える、そのような取り組みを知事にはお願いしたいと思います。

以上です。

【コーディネーター】

小笠原さん、ありがとうございました。

核燃サイクル施設が六ヶ所に出来て以来の発展は目覚ましいという、六ヶ所にお住まいの体験から、この豊かな生活を子や孫の代まで続けるために賛成というご意見でございました。

次は、弘前大学農学生命科学部部長の豊川好司さんです。

【弘前大学農学生命科学部部長 豊川好司】

豊川でございます。

早速、意見を発表させていただきます。

日本原燃会社は、六ヶ所にMOX燃料工場の建設を計画していますが、この工場は、県が受け入れ時の1985年に3点セットの一つとして計画しました。この核燃料サイクル施設に係る立地協力施設であります。これは了承済みであるというものです。

しかし、原子力エネルギーが次から次へとトラブルを招いている状況から、本施設の建設について意見を県民から聴く会を設けたことは当然のことであり、県民に対する真面目な姿勢は大変良いことであると感じております。

私は、核燃開発の専門家ではありませんが、この施設受け入れに関して、広く県民から意見を聴く会ということであり、農学生命科学部分野からの意見を求められたこととして、日頃から感じていることを申し上げたいと思います。

私は、以下の3点について意見を伺いたいと思います。

まず最初に安全性の問題でございます。MOX燃料とは、ご承知のようにウランとプルトニウムの混合酸化物燃料のことであり、再処理してプルトニウムを利用することにありますので、その製造行程においては、特に安全性が配慮されなければなりません。MOX燃料は、ウラン燃料の15万倍のアルファ線を放出すること。しかも、プルトニウムが体内に入り込まれると、アルファ線は体の組織や臓器に直接影響を及ぼし、癌の原因になるといわれています。

MOX燃料は、国内外で生産の実績があるといわれますが、MOX燃料はウラン燃料に比べて中性子線の放出量は1万倍、ガンマ線は20倍と言われます。このような物質を扱う製造行程を安全に取扱うことが出来るのか。これまで予想外の事故、被爆などが生じたことはないのか。詳細に知りたいと思います。県民の健康に関する安全、安心な環境問題としては、県民に正しく知らせることが肝心であると思います。

次に風評被害についてでございます。六ヶ所村には、核燃料サイクル施設など、原子力関連施設が集中立地しています。加えて、MOX燃料工場が建設されれば、六ヶ所村に放射性廃棄物が益々集中化することになります。

例えば、様々な超ウラン廃棄物が発生することになりますが、それらはどのように処分されるのか。また、MOX工場の建設により、ほかの施設で発生した超ウラン廃棄物が、六ヶ所村に持ち込まれないのか。心配が募ります。

このようなことによって、いわゆる風評被害が心配されます。言うまでもなく、この周辺は酪農、畑作地帯の中心地であります。今日、食の安全と安心が国民の大きな関心事となっていることを考慮すれば、これ以上の原子力施設の集中立地に懸念を持たざるを得ないわけでございます。

3点目に、MOX燃料の利用についてでございます。燃料としてプルトニウムを利用する高速増殖炉、すなわち夢のエネルギーと言われ、使用した燃料以上の燃料が得られるという高速増殖炉の安全、実現性は、10年前、1995年12月の原子炉もんじゅのナトリウム漏えい事

故以後、不透明になっております。そこで、再処理により発生するプルトニウムの利用方法の一つとして、MOX燃料を通常の原子炉、軽水炉で活用するプルサーマル発電が考えられていますが、国内外の原発立地地域において反対運動が強いと聞いています。

例えば、福島県知事は、プルサーマル計画に疑問を提起しています。そこでMOX燃料を利用できる可能性は実際にあるのか、お聞きしたいと思います。

また、プルサーマル計画は、コスト的にみて、節約効果は乏しいといわれています。濃縮ウランが、世界的に供給過剰にある現在、再処理、MOX燃料加工が必要なプルサーマル路線は、コスト的にも難点があるのではないかと考えられます。

以上が私の意見であり、また危惧、懸念することです。

最後に一言加えさせていただきます。

21世紀の今、世界が見えない時代といわれています。こういう時代だからこそ、人間の英知である学問、科学をよくよく理解して歩んでいかなければならないと思います。

すなわち、人間社会は、学問、科学の上に発展してきた歴史がございます。原子力問題は科学する気持ちが肝心であり、その利用にあたっては、何をさておいても安全、安心が確保されることが大前提であると申し上げ、私の意見といたします。

ありがとうございました。

【コーディネーター】

豊川さん、ありがとうございました。

最近では、原子力施設で次々にトラブルが起きていると。MOX燃料は、ウラン燃料に比べて、格別に安全性に配慮する必要があると。風評被害も心配であると。プルトニウム利用というのは、本当にウランの有効利用になっているかどうか疑問というふうなご意見でしたが、特別反対とか賛成とかということは明確にはおっしゃいませんでした。

次は、青森県建設業協会副会長の杉山さんです。

【青森県建設業協会副会長 杉山春幹】

私は、青森県内の商工団体関係者の一員として意見を発表させていただきます。

青森県建設業協会といたしましては、昭和59年の原子燃料サイクル施設建設の際にも、エネルギー資源確保の観点から意見を述べたところでございます。ここ数日、報道されております原油価格の高騰に関して、世界経済は既に第三次石油危機の段階にあるという見方さえあります。私達、国民の生活を支えるためには、エネルギー資源を安定的に確保することが必要であり、そのために国、事業者は責任をもってあらゆる手立てを講じなければならないと考えております。

今回のMOX燃料加工施設もその必要性に基づき計画されたものと受け止めております。地球温暖化対策など、わが国の果たすべき国際的な責任にも応えるものであると理解しております。むつ下北地域では、東通村の原子力発電所の本格操業を控え、雇用及び需要創出などの面において、地域経済の振興に寄与するものと期待が寄せられておりますが、さらにこの種の施設の建設が進められることにより、地元経済の枠を超えた県全体の波及効果にも

期待をするところでございます。

しかしながら、放射性物質を扱う施設である以上、国民に対して不安を与えるような事業であってはけません。既に、安定的な操業実績を持つ原子力発電の関連事業ではありますが、これまで以上の安全対策を確立し、地元住民に対する説明責任を果たすのでなければならぬと考えております。

業種、業態が異なることとはいえ、私達も常に作業の安全確保を意識し、労働災害の根絶に努めているものでございます。特に、施設の維持管理及び日常的な作業の安全確保については、直接従事する作業員の不安全行動をどのように排除するかについて、重点を置かなければならないと考えております。

過去に原子力関連施設で発生した事故、労働災害もこのような不安全行動に起因したものであると思われまます。不安全行動を単なるミス、錯誤としているのではないか。人間のもつ本能的、心理的要因に基づく行動であるとの認識のもとに、管理体制を確立していただきたいと考えます。

また、安全管理においては、特定の人間のみが管理、業界に従事するのではなく、第三者による監視、いわゆるサーベランスが随時に行われる体制におくこととなります。不安全要因の徹底的な排除が達成されるものと考えており、関係者の参考としていただきたいと思っております。

以上、ご意見を述べさせていただきました。

今日はどうもありがとうございました。

【コーディネーター】

杉山さん、ありがとうございました。

地域経済の振興に寄与するだけでなく、県全体の経済への波及の点から賛成だというご意見であります。ただし、県民に不安を与えてはいけないと。安全性確保の点から、地元への説明責任を果たして欲しいというご意見でございました。

次は、一般公募の方で、自営業の山内まさかずさんです。

【自営業（一般公募）山内雅一】

原子力の時代錯誤とどうさく、現在に日本には、53基の原発があり、ここ青森には東通原発、六ヶ所のウラン濃縮工場、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター、低レベル放射性廃棄物埋設センター、使用済み核燃料受け入れ貯蔵施設、そしてウラン試験中の再処理工場、むつは使用済み核燃料中間貯蔵施設を誘致し、再処理工場本格稼働前から問題だらけの日本原燃が、MOX燃料加工工場を作ろうとしている。どう思うのだろうか。100年後の私達の子孫達は、どう思うのだろうか。500年後の私達の子孫達は。どう思うのだろうか。1000年後の私達の子孫達は、自分達と血の繋がった人間達が、孫やそのまた孫達の時代へのエネルギーを確保するためといいながら、地震大国であるこの日本に沢山の原子力施設を作ったことをどう思うのだろうか。

百歩譲って、それは良しとしたとしよう。その原子力施設から沢山の放射性廃棄物が出て、

どうすることも出来なくなり、地中深くその放射性廃棄物を埋めてしまったことをどう思うのだろう。子ども達のオモチャに、その放射性廃棄物をリサイクルしてしまったことをどう思うのだろう。

五百歩譲って、それは仕方なかったんだとしたとしよう。その放射性廃棄物を入れた容器が、時間が経過していく中、地中で少しずつ、少しずつ腐食していくことをどう思うのだろう。絶対に安全だという保障が何もないまま、母なる大地に厄介な放射能の塊を埋葬したことをどう思うのだろう。

千歩譲って、高度な文明は多くの犠牲の上に成り立つとしたとしよう。そして、地中へと染み出した放射能が、遠い昔から放された核兵器のように、土や水や空気を汚染し始めたらどう思うのだろう。何億年も消えることのない放射能が、自分達の足元でじわじわと広がっていくことをどう思うのだろう。

五千歩譲って、先祖の行った愚行は、私達が償うとしたとしよう。その放射能が百年、五百年、千年後の人々を体の外から、そして体の中からおかしはじめ、見たこともない子ども達が生まれ出したらどう思うのだろう。誰も悲しまず、誰も心を開かず、誰も何も言わず、誰も責任をとらずに苦しみの時間だけが過ぎていくことをどう思うのだろう。

もし貴方が、その時代に生きていたら、私達のこの愚かさを許すだろうか。自分達のほんの少しの豊かな生活のために、見知らぬ国の見知らぬ人々の見知らぬ暗闇の見知らぬ時代の多くの犠牲の上にどう慢な電気を灯す。この愚かさを許すだろうか。

私達は、途切れ途切れの存在ではない。例えそれが千年の過去であろうと。千年の未来であろうと。そこに私という存在があるはずだ。全ての事象は途切れ途切れにあるのではない。私達の言葉が、私達の行為が次の世代への羅針盤となるのだ。私達は20世紀という100年間で、この地球上を滅茶苦茶にした。21世紀は、希望の世紀だといいながら、さらにそれを加速しようとしている。時代錯誤も甚だしい。何も時代を逆行しろと言っているのではない。懐かしさばかりを大事にししろと言っているのではない。文明や科学技術を非難しているわけではない。ただ、一人ひとりが今生きている中で、少しだけ慎む気持ちを持つこと。そのことが、未来にとってどれほどの宝物となるだろう。

私達は、100年後の子孫達のためにやらなければならないことが沢山ある。私達は500年後の子孫達のために残さなければならないものが沢山ある。私達は1000年後の子孫達のために守らなければいけないものが沢山ある。それは美しいものであって欲しい、それは清らかなものであって欲しい、それは世界中の命が微笑むものであって欲しい。その根底に愛と道徳のあるものであって欲しい。私は、原発も再処理もMOX燃料加工工場もプルトニウムの抽出も、もちろん原爆にも反対だ。それが私に出来る未来への責任だと思うから。

このご意見を聴く会が、単なるアリバイづくりにならないことを願って、本来ならば議論する会であれば良かったと思っています。

【コーディネーター】

山内さん、ありがとうございました。

原子力施設の利用は、放射性の廃棄物を出すと。その廃棄物が私達の子孫の健康を少しず

つ蝕んでいくというお立場から反対というご意見でありました。

以上、16人の方にご意見をいただきました。

前半の予定しました16人のご意見を述べていただきましたので、ここで知事に以上のご意見をお聴きになって、コメントをいただきたいと思います。

【三村知事】

前半ということではありますが、16人の方々から、それぞれのお考えということをお話いただいたわけでございます。

また、それぞれの公募の方あり、また団体の関係の方々ありというわけではありますが、それぞれの方々が我々、青森県におけるエネルギーの大きな核燃サイクルに関わる様々な施設等について、それぞれどういった思いをお持ちかということ率直に語っていただけたと思っております。

今後また、後半、お話を伺わせていただくわけですが、皆様方のご意見、非常に貴重なものとする次第でございます。

前半、私からは以上でございます。

【コーディネーター】

ありがとうございました。

今までの16人のご意見の方に対して、燃料加工施設の安全検討を担当されました専門家の方から、ちょっと補足をしたいというご意見がございましたのでお願いいたします。

大桃さん、どうぞ。

【安全性チェック・検討会 大桃主査】

MOX燃料安全性チェック・検討会の主査を務めました大桃でございます。

いろいろ申し上げたいことは、正直いって個人的にはあるんですが、MOX燃料加工施設の安全性チェック・検討会ということでございますので、それに限定してお答えをしたいと思っております。

一つは、豊川先生が、技術的な安全性についてお触れになりました。

まず私の方から、安全性チェック・検討会の置かれている立場といいますか、それと技術的な内容については小山がお答えすることにいたします。

ご存知のように、このMOX燃料加工施設の立地に関しまして、県が立地要請を受けたと。そして、今後どういうふう展開していくのだろうということをまず最初に申し上げます。

仮に、これはあくまでも仮に、知事がこの要請をお受けになったとしますと、この後は、国による安全審査に移行します。そして、更に、原子力安全委員会による安全性のチェックに移ります。これで2段階のチェックがございます。それにパスして初めて、設工認の申請ができます。つまり、設計と工事のやり方に対する審査というものが行われます。それにパスして、初めて工事ができる。

工事が終わりましたら、今度は使用前検査というものがあって、そしてそれにパスして初めて動くということになります。県のチェック・検討会は、そうするとどこにあるのかとい

うと、その一番前にあるわけです。まだ、計画の段階ですから、豊川先生がおっしゃったように、私達は特にMOX燃料の特徴、プルトニウムを使うということに関連しまして、このプルトニウムが非常に厄介な性質を持っているということに鑑みまして、その厄介な性質をどの様にして抑え込もうとしているのか。具体的に、どういう方策をとって抑え込もうとしているのか。そして、国内外にそのような技術があるのか、ないのか。日本原燃にそれがやれるのかというような順番で検討を進めてきたものでございます。

そして、私は説明会に何回も出席いたしました。その説明会の席上で立ち往生したことがございます。それは何故かと言いますと、品質保証体制を整備した、整備したという口の裏からいろいろなトラブルが出ているのではないかと。それに対して、貴方は日本原燃を信頼するのかという、言ってしまうとそういう意味合いの質問を何回も受けました。

この品質保証体制というのは、体制を作っただけではどうにもなりません。これを動かすのは人です。それからトラブルを重ねる度に改善されていくものであります。こう言いますと、お前はトラブルを認めるのかという話になります。

そこで、国内外に、MOX燃料に限っていいいますと、国内外に先行例がある。十分な経験があるということは、逆にいうとどういうことかという、いろいろなトラブルを経験しているということなんです。それを克服してきているはずなんです。

したがって、整備された品質保証体制を過去に遡って、そういう小さなものも含めて、いろいろなトラブルを拾って、そして品質保証体制を整備していくなれば、将来に向けての安全性は保障されるだろうと。少なくとも少なくなっていくはずであると、私達は考えております。

そして、特に、私達が強調したのは、人の教育、技術の継承、それをしっかりやって欲しいということと、もう一つ申し上げたいのは、人間は慣れてしまうとたんでしまう。だから、一年に一回は運転に携わる人間はテストをして、そして、そのテストに外れた者は採用するなど。その運転に就かせないというくらいの厳しい態度を貫いて欲しいということをお願いした次第でございます。

なお、もう少し臨界安全とか、あるいはご質問がありまして、放射線の問題。つまり、放射線の遮へいの問題。それから、外に漏れないように、閉じ込めの問題。この3点につきましては、小山委員の方からご説明いたします。

【コーディネーター】

大桃さん、ありがとうございました。

それでは小山さん。

【安全性チェック・検討会 小山委員】

小山でございます。

皆さんのお手元に今日資料が配布されているかと思いますが、今、豊川先生がご指摘のプルトニウムの難しさということでのまずアルファ放射能が多いよということと、中性子ガンマ線が多いということ、それぞれ内部被爆の問題と外部被爆の問題を審議したのかという

ご指摘がございました。皆さんの資料の13ページから、それぞれ審議した内容がございますので、これは審議を忘れたわけではございません、ちゃんと審議させていただきました。ご指摘のとおり、アルファ放射能は非常に強いので、内部被爆が起こらないように、グローボックスという密閉構造の中で扱わなければならないんだと。

そしてまた、その密閉構造のグローボックスも気圧を低くして、プルトニウムが外に漏れないような構造にするんだよと、こういうことでございますし、中性子線ガンマ線については、これは外部被爆の問題ですから、遮へい体が必要だし、あるいはそういう線源に近づかない、燃料を作る時には自動遠隔でやって被爆を防止する。どうしても作業員がグローボックスに近づく時は、遮へいすると同時に、グローボックスの中の核燃料物質、プルトニウムは出来るだけ貯蔵庫などのように退避させて、線源を無くするという事で被爆防止をしなければならないんだと。

それから、プルトニウムとしては、特にもう一つは臨界事故ということが心配ですから、それを防止するための臨界管理制限というものを非常に厳しくしなければならないんだよという話です。

それからもう一つ、これは国際約束的な話ですが、プルトニウムというのは核兵器に転用され易いということですから、保障措置、計量管理技術というものをしっかりしなければいけませんよと。こういう観点で、低濃縮ウランと違いますか、現在の軽水炉の燃料と違うMOX燃料の取扱うことの難しさということで審議させていただきました。

それから、MOX燃料関係で事故はないのか、というご指摘もございました。確かに、今、主査が言いましたように、過去にそれぞれプルトニウムを取扱うことで、今申し上げましたグローボックス操作を間違えて、プルトニウムを吸い込んだということのトラブルもございますし、いわゆる手を切ったというようなトラブルもございます。しかし、これも全て量的には極めて軽いと言ったら語弊があるかもしれませんが、程度の小さなトラブルでございます。

なお、MOX燃料加工施設でこれまでに臨界事故というような重大な事故を起こした例はございません。そういう観点を含めて、我々は十分チェック検討させていただいていると理解しております。

【コーディネーター】

ありがとうございました。

これで前半を終了いたしました。

これから15分間休憩をしたいと思います。

ただ今、私の時計で2時48分でございます。ですから、3時3分から再開させていただきます。

どうもありがとうございます。

----- 休 憩 -----

【コーディネーター】

後半、最初の発表者は、青森県商工会連合会副会長の蛭沢まさかつさんです。

【青森県商工会連合会副会長 蛭沢正勝】

青森県商工会連合会副会長の蛭沢です。

本日は、意見発表の機会を与えていただき、ありがとうございます。

また、平素より当会に格別なるご指導、ご協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。

さて、MOX燃料加工施設についてですが、私は、昨年9月に県が毎年実施している原子力エネルギーの先進地視察研修のメンバーの一員として参加させていただきました。

視察研修先にフランスのMOX燃料成型加工工場、メロックス工場があります。その時の研修内容の一部を報告させていただき、最後に私の意見を述べさせていただきたいと思えます。

メロックス工場は、コジュマ社が所有して、フランス南東部にあるマルクールはアビニオンの橋で有名なアビニオンから車で1時間離れたフランスの原子力エネルギーの発祥地、マルクール原子力センターに位置している。この工場は、大規模な生産能力と自動化設備を備えている。工場の生産規模は、250トンヘビーメタルまで生産できる能力を持っており、これまでの累積生産量は1,100トンになっております。

従業員は、下請け等を含めると、約900人雇用が確保されております。工場から道路を一本隔てた所にはぶどう園が沢山あり、ワインづくりが盛んな地域で、また、大きな川があり、魚釣りを楽しんでいる風景も目に止まりました。

MOX燃料の利用は、欧州で先行し、現在ではフランス、スイス、ベルギー、ドイツの4か国で商業的に利用されている。フランスでは、20基で約1,600体。また、スイスでは3基で約280体の利用実績があります。使用済み燃料をリサイクルし、MOX燃料を作ることによってウランの節約になり、ウランの一年間の節約量は3,000トンで、世界中で高い位置にあります。

時間の制約がありましたので少し早かったと思えます。

地元住民との関わりについて、従業員の25%は5キロ圏内に住んでおり、地元のカール県からの購買は、60%強で、その年間総金額は4千万から5千万ユーロ、日本円で3億5千万だそうです。

情報公開については、地元情報委員会を設置し、委員には地元議員から多種多様なメンバーで、マスコミ関係者や反対者の委員も入っていると。3か月に一回は地元ニュースレターを配布している。各種団体のイベントや環境整備などに援助している。

こういうことで、私が見てきた中では、MOX燃料は六ヶ所に立地することには賛成でございます。

原子力発電所の必要性、安全性、地域住民との関わりなど、自国で対応処理するという基本的な姿勢、考え方を聞いて参考になりました。原子力発電は、二酸化炭素の排出が少なく、逆に施設の安全性が確保されるならば、地球温暖化防止の観点から、我が国においては、是非必要な施設と考えられます。

さて、この度、六ヶ所村へのMOX燃料加工施設の立地については、先進地を見習い、立地を進めることによって地域経済活性化はもとより、上北、下北を原子力産業と一次産業をよりよい関係に導くような運営指導に進めていただきたいと思います。

原子力施設は、安全第一であり、この地域を安全マークで売れるように、事業者はもとより、国、県、各自治体、関係する業者、従業員までが責任を持って行動するべきだと思います。

国、県、事業者は、安全、安心の言葉を常々発するけども、地域全体が安全、安心ブランドを確立するような啓発活動を進め、また、そのためには、品質保証体制の確立を望みます。

フランス、ラーク地方の乳製品が、安全ブランドでパリ地方で沢山売れているようなお話も聞いてきました。

最後になりましたが、県連合会の上三ブロックでは、攻めの農林水産業を農協、漁協さんと一緒に企画、実践する予定です。この地域の生産物が、消費者に安全、安心と胸を張って売れるように頑張りたいと思います。

以上を申し上げまして、私の意見発表とさせていただきます。

【コーディネーター】

蛭沢さん、ありがとうございました。

ただ今、フランス、メロックス社の加工施設を見学なさった体験などをもとに、賛成というご意見でございました。

ただ、原子力施設と一次産業とは、共に栄えるように、安全性に十分なる配慮をというご意見でございます。

続きましては、核燃サイクル措置一万人訴訟原告団、事務局長の山田きよひこさんです。

【核燃サイクル阻止一万人訴訟原告団事務局長 山田清彦】

核燃サイクル措置一万人訴訟原告団の事務局長をしています山田です。

代表から原稿を預ってきましたので、読み上げて意見とさせていただきます。

青森県の開発の歴史は、原子力開発技術の歴史であったといっても過言ではありません。原子力船むつの廃船がその典型であります。そして、核燃サイクル立地の是非が問われています。

核燃は、県や村が期待したような、地域振興の役割を果たしているのでしょうか。立地から20年、電源三方交付金、核燃税、固定資産税が地元へ落ち、土建業者の懐が潤ったことは事実でしょう。

しかし、この核燃マネーが本当に県民の生活向上、福祉の増進に繋がっているかを考えると、残念ながら“ノー”といわざるを得ません。

知事は、県民の生活実感を率直に聞くべきです。核燃が、県経済の起爆剤になると信じて受け入れたのなら、どうして県民所得は沖縄に次いでビリから2番目なのでしょう。日本原燃という大企業がくれば、出稼ぎはしなくてすむと宣伝されましたが、それなら何故、有効求人倍率は全国最下位なのでしょう。核燃関連企業がはりついて、地域経済も繁栄する

はずでしたが、本年度の法人事業税収入は、やはり全国最大の落ち込み幅を記録しました。そして県財政は、今、核燃マネーなしでは維持できない状態に陥り、青森県はまさに原子力城下町になり下がってしまったのです。

なお知事は、エネルギーフォーラムという雑誌の2月号のインタビューで、青森県は豊かな自然に恵まれて、農産品や海産物については絶対的な自信があるのですが、物作りについては遅れている面があります。これから、再処理事業が進めば、地域の企業にもいろいろな技術移転がなされるだろうし、メンテナンスなどは必要な物品を地域で調達することもあると思います。原子燃料サイクル事業に期待していることは、雇用創出や経済活性化に貢献する形で、物作り産業が発展していくことです、と答えています。

今の時代、食の安全が求められております。農産品や海産物にも安全が求められるのは言うまでもありません。その優良な生産地に核燃サイクル事業が導入されれば、またたくまに不安なものに変わるのとは明らかです。

再処理事業や核燃サイクルの事業は、どれも核管理と放射能汚染を伴い、技術移転の前に厳しく情報管理がなされるのです。どうして新しい企業興しの種になると考えるのでしょうか。メンテナンスというのは被爆作業です。被爆労働を生むメンテナンスに参入して、地元雇用を望む声もありますが、他人の健康と生命の犠牲の上に成り立つ業種でしか、青森県は経済活性化ができないのは、青森県経済界の能力が欠落しているからなのか、知事の舵取りが悪いのか、どちらかではないのでしょうか。

1985年4月9日、故北村正哉県知事が、青森県議会全員協議会で、核燃の受け入れを表明しましたが、県民には内緒で数年前から誘致を繰り返していた事実が明らかとなりました。交付金欲しさに、同様な誘致を今もしているのではないかと疑わしい思いがします。

例えば、世界レベルでもMOX燃料の再処理実績が、商業ベースでは全くないということですが、使用済みMOXの再処理工場誘致と考えているとすれば、核のゴミの周知を加速するだけですと止めて欲しいです。

青森県には、核燃に加えて、東通原発、むつ中間貯蔵施設、ITER等、まさに原子力のオンパレード状態です。まさに青森県は原子力依存体質。原子力中毒の末期症状をきたしているといわざるを得ません。

再処理の先行きが不透明な現状のもとで、MOX加工工場の建設がエネルギー政策を考える上で有意義かどうかは、知事が対極的検知から判断すべき事柄であると同時に、県民の生命と財産を守る責務を有する知事の立場から、地域振興と無縁な核燃施設をもう一つ増やし、県民に更なる危険負担を強いる暴挙を重ねることは、思い留まっていたきたい。

プルサーマルを毅然として拒否している福島県知事、新潟県知事に見習い、本施設の立地建設を認めるべきではありません。

今、弾道ミサイルの飛来に備えるとか、核テロに備える時代を迎えています。このような時代に、再処理工場のウラン試験も即止めるべきです。また、これ以上核燃サイクルの集中立地は、青森県民の生活と生命に大きな不安を残すものと思います。断固として拒否していただきたいと思います。

以上です。よろしく申し上げます。

【コーディネーター】

山田さん、ありがとうございました。

核燃は期待されたような経済効果を上げていないと。青森県の原子力依存体質、中毒症状は先行き不安であるというご意見で、反対というご意見でございました。

次は、一般公募、農業の菊川けい子さんです。

【農業（一般公募）菊川慶子】

菊川です。

今日は、知事が直接意見を聞いてくださるということなので、ちょっと恥かしかったのですが、応募させていただきましました。ドキドキしていますので、ちょっと聞き取り難いかと思いますが、一生懸命話しますので、是非聞いて下さい。

MOX燃料工場については、私は六ヶ所村には不用であるということをもまず第一に申し上げたいと思います。

その理由として、次に3点申し述べます。

まず第1にプルトニウムを生産する再処理工場の先行きが不透明であるということ。これは先ほどから反対している方々がいろいろ理由を述べておりますので、そこにはふれないで次にいきたいと思いますが、それに加えて、IAEAの凍結論も今出てきています。この先、本当に国際的にもストップがかかるかもしれないという状況の中で、なおその先にあるMOX工場というものをまだ考えるべきではないと思います。

その理由の2としては、原子力産業は、地場産業にはなり得ないということです。六ヶ所村は、個人所得が県内の全市町村中1位であるということが、先日新聞で発表されました。ところが、そんな豊かな村のはずなのに、生活保護の数が、ここ30年ほど変わっていないと聞いております。そして、国民年金の未納率は、これは全市町村中下から2番目という、そういう貧富の格差が非常に開いている。村全体が豊かになっているわけではないということです。

では雇用はどうかといいますと、日本原燃の従業員2千人ほどだということですが、その中で村で雇用されている人はたった160人ということです。1割にも満たない。そして村にある県立高校から採用される人も少ないということです。雇用されても、仕事についていけないで辞める人も多い。こういうことから、原子力産業は、地場産業にはなり得ないというふう実感しております。

そして、理由のその3としては、村民が望んでいないということです。大多数の村民が望んでいないということです。これは、村民の意識調査ということで、2年ほど前に法政大学の船橋晴俊研究室の方々が実地調査されました。そのアンケートから抜粋しますと、核燃施設については、約7割弱が不安であると。そして再処理操業については、やはり約7割強が不安というふうに答えております。これは、回答者中4割の人が原燃に勤めているか、その関連産業に勤めている方々です。

そして、この中の約8割の方が、これ以上村に放射能を持ち込まないで欲しいと答えてい

ます。同じく8割の人が、原子力発電ではなく、クリーンエネルギーの開発普及を望んでいるという結果が出ています。

住民こそが主体であるのですから、立地村の8割もの人がこれ以上放射能を増やさないで欲しいという時、知事は、やはりそれを是非聞いていただきたいと思います。

今、原子力発電は、夢のエネルギーと言われる高速増殖炉を追求しているということですが、これはもう50年来技術の発展がありません。ところが、クリーンエネルギーである燃料電池、そして風力発電など、そういう日進月歩の技術は目覚ましく発展しています。是非六ヶ所村にそういう企業を誘致していただきたい。そして技術も学歴もない村の人達が気軽に働ける地場産業を作って欲しい。それは何かと言いますと、やっぱり第一次産業と六ヶ所村の豊かな自然を生かした観光産業であると思います。

今日、議論された方々の意見を伺いまして、意見を発表された方々のお話を伺いまして、いろいろ議論をしたいことがいっぱいありますので、これを最後にせずには是非今度は公開の討論会を開いていただけたら県民、そして村民ももっともこの問題に関心を持っていただけないかと思えます。

故郷を愛する気持ちは本当に皆同じですし、子供達に良かれと思うことも皆同じです。是非慎重に考えて、このMOX工場の誘致を断念していただきたいと思えます。

よろしく願いいたします。

【コーディネーター】

菊川さん、ありがとうございました。地元は原子力産業を望んでいないと、原子力産業は地場産業には成り得ないと、むしろ風力とか燃料電池の企業を誘致して欲しいというご意見で、反対というご意見でございました。

次は、一般公募の会社員で三本松勇二さん、お願いします。

【会社員（一般公募）三本松勇二】

本日は、MOX燃料加工施設について意見を述べる機会をいただき、誠にありがとうございます。

私は、三菱マテリアル六ヶ所建設事務所におきまして労働組合の委員長を務めております三本松と申します。私の所属している三菱マテリアルは、日本原燃の協力会社として再処理工場の精製施設、ウラン脱硝施設、ウランプルトニウム混合脱硝施設の3施設について試運転の業務を請け負っております。

私はその中で精製施設において、現在実施中でありますウラン試験を日本原燃の職員の方々と一緒に行っているというところでございます。

本日は、六ヶ所村の再処理施設で働いている協力会社の労働組合の立場、そして入社以来原子力の現場第一線で私は働いてきましたが、そこから見てMOX燃料工場の必要性、そして品質保証について、その2点について意見を述べさせていただきたいと思っております。

最初に、MOX燃料工場の必要性についてですが、エネルギーの安全確保は国民生活や産業活動にとっては重要な課題であります。日本はエネルギーの自給率が僅か4パーセントと

非常に脆弱な状況にある中、今や原子力発電は電力供給の3分の1を占める状況になっております。原子力は将来にわたって基幹エネルギーの役割を果たすものと考えております。

原子炉を運転したらエネルギーが出ます。それと同時にプルトニウムも生まれてきます。低濃縮ウランを使う現在の原子力発電では、エネルギーの生産とプルトニウムの生産を切り離して考えることはできません。世界のウラン資源は、カナダ、フランスなど、資源会社などにより寡占状態が現在進んでおります。石油もメジャーが独占しています。一旦何か起こると日本の足元は大変脆弱です。

そこで、ウランだけではなくリサイクルしたプルトニウムが大変重要になってくるわけです。プルトニウムは日本の原子炉で生まれる国産資源であるからです。プルトニウムをMOX燃料としてリサイクルするプルサーマル計画について、電力会社が当面目標としています。プルサーマル原子炉、16から18基になりますが、それを実現しただけでも約2割のウランの燃料が節約できると言われております。

このような観点から、再処理工場を着実に動かしていくこと、そしてMOX燃料加工施設によるプルサーマルの確立は、資源の乏しい日本として着実に実現させていかなければならないことと私は考えております。

次に品質保証についてですが、品質保証については安全を確保するということが最重点としております。ここでは品質保証の中、安全に視点を置きまして、私が実際に現場で働いている目で、そして体で感じたことを率直に述べてみたいと思います。

安全とは何なのでしょう。私は人だと思っています。安全を守るのも、それを破るのも人なのであります。その人がどれだけ安全に対する意識を高め、そして実践していけるかが重要なことだと思っています。それを導き、フォローしていくのが品質保証体制であり、組合であり、会社ではないのでしょうか。

最近、現場でよく「安全確認よし」とか、「作業手順よし」という言葉を再処理の中で聞くようになりました。それが何故か自然に声が出てくる、癖になっているという感じでしょうか、そういう感じに聞こえるようになってきました。この言葉一つをとっても、品質保証意識が浸透してきていることの現れだと私は感じています。これはほんの一例にすぎませんが、その一つ一つの安全作業の積み重ねが県民の皆様の信頼を得て、またそれが安心感に繋ぐことができると私は思っております。

そのために、労働組合としても一人ひとりの安全意識を職場の活力とともに高めていきたいと考えておりますし、日々の業務に緊張感を持って取り組むことにより、サイクル施設で働く者としての自覚と自信をさらに深めていくよう努力したいと思っております。

そして、会社と我々労働組合、さらには日本原燃と我々のコミュニケーションを深め、我々の声、あるいは働いている姿がもっと県民の皆様に伝わればいいと私は思っております。

本日は、その第一歩として私の意見を聴いていただくことができ、少しでもサイクル施設で働いている人間が何を考えているのかをお伝えできたとしたら幸いです。

以上で私の意見発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【コーディネーター】

三本松さん、ありがとうございました。エネルギーの自給率が4パーセントという日本で、日本の原子炉で生まれたプルトニウムは国産エネルギーであってウランの節約にもなると。自分が現場で働いていらっしゃるご経験から、現場で品質保証意識、安全意識が向上しているから信頼して欲しいというご意見で、賛成というご意見でございました。

次も一般公募で、会社役員の岡山勝廣さんです。

【会社役員（一般公募）岡山勝廣】

六ヶ所村から来ました岡山と言います。今日は意見を聞く会を開いていただきまして、大変ありがとうございました。感謝申し上げます。

少資源国日本が世界に冠たる産業国として今日の発展を築いたのは、インフラ整備として安定した電力供給体制が確立されたからであります。原子力発電は日本の電力生産の30パーセントを占めるに至り、かつ地球環境問題を考えた時、今後も重要な地位を占め、日本の国策として今後も推進することを昨年国が再確認いたしました。

六ヶ所村は、日本の国策である原子力事業を村民の総意として受け入れ、共存共栄の道を歩んでまいりました。

原子燃料サイクル事業において、日本原燃の再処理事業とMOX燃料工場は表裏一体をなす重要性の高い事業と位置付けられると思います。

今、再処理事業は施設内における不適正施工の発覚とその改修工事により、当初予定より大幅に遅れてはおりますが、問題発覚後の日本原燃の動きを見ますと、施設の改修、改良、品質保証体制や情報公開制度の確立と改善、専門家による施設安全性チェック検討委員会の開催など、不良施工発生後の事業者の安全性確保に対する姿勢・努力は評価できると思います。安全・安心を確認する方策に、これでよいということは無いとの見解もあるとは思いますが、現状において確認できる高度な知識を有する高いレベルの技術者、そして有識者の判断を了とすべきと考えます。

また、三村知事においては、就任以来原子燃料サイクル事業では安全・安心を第一に慎重に判断すると表明してこられました。このMOX燃料工場立地については、原燃のプール水漏れ問題を踏まえ、安全性を十分に検証すべく、安全性チェック・検討会における専門家による慎重な審議結果をもとに、県議会議員全員協議会、市町村長会議等を開催し、説明し、さらに県民に分かりやすい説明会等を繰り返し開催し、県民の理解の醸成に努めてこられた姿勢は大いに評価できるものであります。

知事、大変ご苦勞さまでございました。

以上のことから、判断するに十分な内容と慎重さが認められるところであり、審議を尽くしたものと思慮し、安全・安心の確保を第一義として、かつ六ヶ所村と青森県の地域振興を図る意味でも立地を了解することに賛成であります。

六ヶ所村においては、六ヶ所サイクル施設対策協議会、そしてまた六ヶ所村村議会による全員協議会でこの立地は賛成すべきだと、早期に決めるべきだという意見がほとんどを占めております。

重ねて申し上げますが、六ヶ所村民の総意として安全・安心の確保を第一義として立地を

了解することに賛成であります。

以上が私の意見です。よろしく願いいたします。

【コーディネーター】

岡山さん、どうもありがとうございました。原子力はエネルギーの安定供給に重要な役割を果たしてきた、事業者の安全確保の姿勢は信頼できるという理由で、安全確保を条件に賛成だというご意見でございました。

次は、青森県交通安全母の会会長の間宮安子さんです。

【青森県交通安全母の会会長 間宮安子】

青森県交通安全母の会連合会の間宮でございます。高齢になりまして、最近のオール電化住宅とか快適な暮らしのための電化製品の広告に心を動かされています。省エネにも随分気を付けているつもりですが、今年のような大雪ではそれも十分とは言えません。地球の温暖化が進む中、ここ1年の国内の災害を見ますと、これからの異常気象ということも考えられます。

エネルギー資源の乏しい我が国では、クリーンなエネルギー源として、また再処理というリサイクルによってその資源が活用できるという両面から国の原子力政策が進められ、青森県が全面的に理解し協力してきました。

今、さらに使用済み燃料を再利用するMOX燃料が長い間の研究・実験によって実用化されようとしていることに、驚異的な科学の進歩を実感し、身近な老後の暮らしにエネルギーの心配はないであろうことに安堵し、日本のエネルギーの将来にも明るさを覚えます。

中でも、発電中に生じるやっかいもの扱いのプルトニウムがMOX燃料として生かされることに期待したいと思います。

既に、専門家会議の答申も出ていることに納得しておりますが、ただいくつかの心配はあります。これまでの施設においての様々なトラブルは、臨界事故とまではなりません。しかし一般の市民にとっては大変難しい、分かりにくい分野であるだけに不安が大きくなります。また、国の原子力政策が不安定に思えるのは私だけでしょうか。

先日も、ある会議で申し上げたことなのですが、日本原燃のテレビのCMのコピーに、一人ひとり、一つひとつという優しい言葉が出てきます。大勢の人々がそれぞれの立場で重大な任務を持っていることを自覚させること、それが一人ひとり、一つひとつの確かな形、大きな安全と安心の豊かな事業につながると思います。

国策については、県民の代表である知事の良識と毅然とした態度で仕切っていただきますようお願いし、私の意見とさせていただきます。

ありがとうございます。

【コーディネーター】

間宮さん、ありがとうございました。原子炉燃料の廃棄物がMOX燃料として生かされると、将来のエネルギー供給に明るさを感じるという立場からという理由で、賛成というご意

見でございました。ただ、原燃のCMにあるように、一人ひとりがよく自分の任務を自覚して欲しいというご意見でもございました。

次は、原水禁青森県民会議代表の今村修さんです。

【原水禁青森県民会議代表 今村修】

原水禁の今村です。私どもは、核と人類は共存できない、核兵器であれ、平和利用と言われる原発であれ、核と人類とは共存することは不可能だと、こういう立場で活動をしているものであります。

今回のMOX燃料加工工場の問題についても、私どもは、これは六ヶ所に造ってはならん、止めるべきだと、こういう立場で今日発言をさせていただきたいと思えます。

先ほども、チェック検討委員会の大桃さんからお話がありましたが、あの検討委員会の報告、私どもから見ると無責任だと思っています。事業者が品質保証体制をきっちりやれば、これは安全が保たれる、こんな内容です。昨年10月、水漏れ事故があった後に、私どもに内部から、原燃が出した品質保証体制はまやかしたと、こういう内部告発がありました。原燃に申し入れ、県に申し入れました。しかし、品質保証体制は完全です、こういうお答えです。その後何が起こりましたか。設計ミスが起こって、硝酸漏れが起きる。こんな状況が続いています。これでこんなことが言えるのかと思えます。

私どもは、過去の歴史を振り返ってみて、あの六ヶ所に核燃サイクル施設が造られた当時、二本の原子力政策の中では日本独自のエネルギーを持つことができる、環境対策ができる、ですから日本は原子力で1億キロワットの発電をする、日本に100基の原発を造る、こういう計画を提示し、その中で核燃が出てきました。

今、原発はいくつ動いていますか。53基です。発電している量はいくらですか。完全に全部が動いたとしても4500キロワットです。なぜ半分に留まっているのか。これは説明したような内容が、国際的にはどんどんどんどん後退をし続けている。その現れであると思っています。

今、ヨーロッパを中心にして原発を止めよう、あのフランスでさえ高速増殖炉断念、こういう取り扱いをしてしまいました。ドイツでは原発でなく別のやつでエネルギーを作ろう、燃料電池だ、風力発電だ、こんな形が変わろうとしています。新しい発電の方式がどんどんどんどん出てきています。原子力を動かして、お湯を沸かして、タービンを動かして発電をするというやり方、国際的にはあまりにも危険で、そして採算が取れなく、そして出てきた廃棄物の処分は将来の子供達に押しつける、こんな発電のやり方は変えていこう、こういう方向にどんどん進んでいます。

先日のNHKのテレビでも、燃料電池によってまもなく携帯電話もパソコンも車も一般の家庭も電気をまかなう時代が来ます、もうすぐ実用化です、こういう報道がなされています。

私どもは、こうした新しい時代のエネルギーをきっちりと受け止める、そのことが必要だと思っています。原子力というエネルギーの持つ負のいろんな問題を、私どもはもう克服すべきだと思っています。

六ヶ所に行ってみて下さい。風車がどんどんどんどん立っています。あの風車で水を分解

して、水素を取り出して、燃料電池の工場をあの地域に造ることができるとすれば、全ての県民が諸手をあげて賛成すると思います。そんな方向に是非とも進んでいただきたい、そのことを強く思うものであります。六ヶ所の核燃は、当初3施設だと言われました。ところが県の出す文書も、日本原燃が出す文書も4施設になっています。なぜ四つになったのか、県民には全く説明がありません。高レベル廃棄物貯蔵施設がどーんとあそこにあります。3施設要請があった時には、私どもにも一切そんな説明はありませんでした。再処理工場の下に日本の大きな断層が走っていることも内部告発で初めて明らかになったんです。

こうした歴史を振り返ってみる時に、私どもはもう精算をすべきだなあと、こんな気がいたします。

是非とも知事におかれては、こうした動きをきっちり捉えて、原発ではなくて新しいエネルギーによって電気を作る、その先進県に青森がなるように是非とも頑張ってください。そのことをお願いして終わります。

【コーディネーター】

今村さん、ありがとうございます。核と人類は共存できないというお立場から、加工施設の建設は反対だと。風車を回して水素を作って燃料電池を使う、そういう方向に進む青森県が先進県になって欲しいというご意見でございました。

次は、一般公募の会社役員の種市治雄さんです。

【会社役員（一般公募）種市治雄】

六ヶ所村から参りました種市でございます。この度は、MOX燃料加工施設立地検討に伴い、意見陳述の機会を頂戴し、誠にありがとうございます。

私ごとき若輩がはなはだ僭越ではございますが、青森県民の一人として本日は率直な意見を申し述べさせていただきたいと存じます。

現在、六ヶ所村の再処理工場におきましては、平成18年、一部報道では平成19年ということでもありますけれども、いずれにいたしましても操業稼働に向けたウラン試験が順調に推移される中で、いよいよエネルギー事情のグローバル化が実現されようとしていることは大いに賛意を表し、地域といたしましても喜びにたえないところでございます。

私は商工会の青年部活動を通じて、この事業に対し深く理解し、知る義務と共存共栄する権利とを十分認識した上で、多くの仲間達、ひいては各界の有識者・専門家の先生方を交えながらこれまで議論を深めてまいりました。プルサーマル計画を含めた核燃料サイクルの確立は、大きなメリットが期待できる一方で、その技術が生みかねないリスク自体、しっかりと評価することの観点から、サイクル施設と地域の密接な関わりは事業推進を図る上で必要不可欠な要素であると同時に、安全性を第一義とした事業運営は、そのコラボレーションの最たるところであろうと考えます。

MOX燃料加工施設の立地における議論は、平成14年8月東京電力によるデータ改ざん問題をきっかけに一時停滞していたような状況にも思われますが、しかし、私ども地域住民はむしろその必要性からも早期着工に対する意識の高まりすら感じられたことは事実でありま

す。

国が推し進める地方分権の中で、青森県、並びに六ヶ所村の貴重な雇用創出源であり、重要な産業基盤といった観点からも、その有益性は極めて重要視すべきところであり、決して次世代へ負の遺産になろうなど、考慮するところは無いものとして、次の2点に対して要望いたします。

1点目は、当初原子燃料サイクル施設立地基本協定に関わる対象施設には、当該施設は含まれていないと理解いたしますが、これまでの経過を踏まえた地元自治体等からの提言を考慮した立地のための新たな条件整備に早急に取り組んでいただきたくお願いいたします。

2点目は、未だ地域性によって原子燃料サイクル事業に対する理解度に温度差があるのは否定できないような状況下で、県といたしましても事業推進における積極的姿勢をさらに明確化することで、150万県民誰もが豊かな生活を送れることのできる政策の実現を図っていただきたくお願い申し上げます。

終わりに、本日意見陳述に立たれたそれぞれの立場で、慎重的意見を述べざるを得ない方々もおられます。私達は同じ日本国民としてお互いを理解しつつ、施設との共存共栄を理想とし、この場のような機会の意義深さに共感と感銘を覚え、これまでの先人の努力に報いるためにも、一日も早い操業運転を心から念願し、私の発言といたします。

【コーディネーター】

種市さん、ありがとうございました。六ヶ所村にお住まいの種市さんは、核燃施設と共存共栄する権利があると。核燃サイクルには大きなメリットが期待できる。負の遺産にはならない。一日も早く建設して欲しいというご意見でございました。

次は、青森県中小企業団体中央会、副会長の安部紘さんです。

【青森県中小企業団体中央会副会長 安部紘】

中小企業団体中央会の安部でございます。私は、原子燃料サイクル事業推進は、我が国のエネルギー事情を考えた際には、無くてはならない事業であり、当然に国策として進められてきたものに対して、本県がそれに協力をしているという認識をしているところであります。

エネルギー資源に乏しい我が国にとって、原子力発電は総発電量の3分の1、31パーセントを占めている現状であります。さらに、この割合はますます増えると予想されているところであります。

その一翼を担うべく核燃料サイクル事業は、六ヶ所村において建設が進められてきました。これにより、自治体にとっては交付金や税収等の増額が図られ、また工事施工に伴いまして地元企業の工事請負、さらには工事に関連する就労人口などを勘案すると、大変大きな地域振興、並びに経済効果があったと考えているところであります。

ちなみに、建設工事発注額は約2兆1400億円。これに対して、地元企業が受注した金額が17パーセントの3500億円と聞いております。この地元受注額が大きいのか小さいのか、これはちょっと意見が分かれるところではないのかなと思います。

何しろ、本県で初めての核燃料施設工事であります。地元の企業はその原子力に対する技

術力の問題、こういったことからこの受注額が出てきたのかなと思っっているところでありま
す。

しかし、原子力に関する知識が無い、工事实績が無いということで、地元企業が参画でき
ないまま進められてきたような気がします。そのため、地元企業に原子力技術が蓄積されな
いまま現在に至っていると考えます。その意味では、県は、また日本原燃は地元企業育成と
いう観点から少し配慮が足りなかったのではないかなと考えます。

現在、遅まきながら県内の企業は原子力の専門知識について鋭意勉強をしているところで
ございます。

さて、本日の議題でありますMOX燃料加工施設は、ウラン資源の有効利用という観点か
らしても、我が国の原子力発電を推進する上でも是非必要であると考えます。しかしながら、
この建設にあたっては万に一つの事故があってはならない。安全の上に安全を期して進める
べきであります。そして、工事施工にあたっては、先ほども申し上げましたように、今度は
建設当初から地元県内企業を参画させて進めて欲しいものだと思います。地元県内企業は長
年地域に根ざし、地域においてその施工をしてまいったところでありまして、施工に関わる
最大の責任に努力を払うことは請け合いであります。

また、この原子力建設に関わる、参加をすることによって得られた技術は、その他の物づ
くり大きく反映されるものであります。

どうぞ、県内企業を原子力技術を是非養成をされながら日本のエネルギー産業推進のため
にMOX燃料加工施設の建設を進めていただきたいと思います。

以上であります。

【コーディネーター】

安部さん、ありがとうございました。燃料加工施設はウラン資源の有効利用、原子力発電
の推進のために必要な施設であるという点から、賛成というご意見でございました。ただ、
地元企業に原子力技術が蓄積されていないと、この配慮が欲しいと、この技術は他の物づく
りにも役に立つと、こういうご意見でございました。

次は、八戸工業大学学長の高橋 燦 吉さんでございます。

【八戸工業大学学長 高橋 燦 吉】

高橋でございます。今日は個人的な意見を申し上げさせていただきます。

私は、平成14年度以降今日まで、八戸・十和田・むつ地区の小学5年生でござい
ますが、毎年300人ずつ、30年後のエネルギーと生活についてアンケートをして
おります。その結果、約80パーセントの児童が、エネルギーの供給は将来悪化し、
生活レベルは落ちると悲観的に見ております。CO₂問題もよく知っております。
環境問題も認識しながら、現在の生活レベルを落としたいと考えております。

このように、若い世代の地球温暖化対策や我が国のエネルギーの長・中期的安定供給につ
いての認識は、我々が考えている以上に高いものがございます。

従って、若い世代への希望という灯火を本県が率先して灯そうとしていることは大変重要

なことだと認識しておりまして、私は国のエネルギー政策が核燃リサイクルということの確立を不動不変の方針としているならば、私はこれは推進すべきだと考えております。

しかし、それにつきまして、現在原子力と本県にとって安全確実にこの技術と設備を完成させることは極めて肝要でございまして、そのために私は三つほどご注文を申し上げたいと思っております。

まず一つは、MOX加工設備建設技術の現状についての認識でございます。この再処理装置と同様に、MOX燃料加工施設の建設は我が国で初めての体験大変でございます。従いまして、約50基の装置を持ち、約40パーセントの電力を供給している原子力発電の技術とは基本的に違う未完成のものであるということをまず認識して取り組むべきである。MOX燃料加工施設は、現在東海村に研究装置はございます。しかし、これはあくまで研究装置であって、生産を目的とする設備は今回が初めてでございます。従いまして、今後技術を積み重ね、改良を重ねていく過程で、数多くの課題は出ると思います。しかもその課題は、燃料再処理設備以上に困難な問題が出てくるということを感じておかななくてはならないと思います。

それから、現在この不況の中、再処理設備で問題になりましたのは、私は一つには企業に対する予算、時間的なプレッシャーが不要な問題を引き起こしたということを感じておりまして、こういう現状を認識の上に、私は県として十分この点を考慮した体制、技術力、資金及びスケジュールに基づく対応を明確に国、原子力業界に対して要求し担保することをお願いしたいと思っております。

二つ目は、技術評価組織の設置による対等的協力の推進でございます。燃料再処理施設建設を始め、原子力関係トラブルの相次ぐ発生は国民や地元住民の原子力全般への信頼を著しく損ない、原子力エネルギーの平和利用を否定しかねない深刻な状況にあると思っております。この現状を考え、本県は仮にMOX燃料加工施設建設に協力するにしましても、私はこれまでの国へ全てお任せという姿勢は改める時期にあると思っております。

そこでご提案でございますが、私は本県が主体となって構成するMOX加工燃料技術評価組織を作り、ある程度の技術評価と提案能力を自ら持って、対等かつ建設的な議論をし協力を進めるべきだと思っております。

三つ目は、私は本県は原子力施設の施設を県特有のエネルギー資源として捉えまして、これを活用する地域社会文化システムづくりの構想を持つべきだと思っております。これに基づく要求と折衝を国とすべきと考えております。

例えば、高レベル廃棄物、それから使用済み燃料中間貯蔵施設は、受け入れ後、約50年にわたって無料で熱が使えるエネルギー源でございます。これを地域の冬季の高付加価値農業と結び合わせる。それから日本は1人あたりのエネルギーあたりGDPは世界第一でございます。これを追求いたしますと、私はCO₂排出問題が厳しくなる将来、文化社会システムは世界に売れる青森の技術となると思っております。今冬の青森市の豪雪は地球温暖化に伴う海水温の上昇によると考えれば、これは今年だけの問題ではなくて、今後恒常的に進んでいくと私は危惧しておりまして、本県が未利用原子力エネルギーを活用する多雪地域都市づくりを進め、世界に冠たる省エネルギー、高GDP社会システムと文化を創造すれば、原子力の恩恵は私は全県民にあまねく及ぶと思っております。是非ただ今申し上げましたよ

うな三つの点、ご考慮いただきまして推進をお願いしたいと思っております。

【コーディネーター】

高橋さん、ありがとうございました。若い児童の80パーセントは日本の将来に不安を持っているけれども、その不安の若い人に希望を与えることに役に立つなら、この加工施設の建設は賛成だと。ただ、MOX燃料の技術はまだ未完の技術であるから、そのことを自覚してやれと。それから、技術評価組織を作れとか、廃棄物の農業利用などを考えて欲しいという要望がございました。

次は、青森公立大学教授の阿波田禾積さんでございます。

【青森公立大学教授 阿波田禾積】

栗田です。今日はMOX燃料加工施設について意見を述べさせていただきます。

私は他の大学の先生方とは違ってまして、専門が経済学です。いわば社会科学の分野です。公立大に来る前は、多少エネルギーに関係した研究所におりました関係上、いろんなエネルギー政策だとかについて少し携わっていた時期があります。そういう観点から少しお話をしたいと思っております。

MOX燃料加工施設については、やはり原子力、あるいは原子力燃料サイクル、そういう政策の中で考えないといけないわけですし、そういう意味では、私個人の意見としましては限られた資源制約、例えば化石燃料の枯渇だとか、環境問題、CO₂発生の問題ですね、そういういろんな制約がある中で、いろんなエネルギー源というのが自然エネルギーも含めましていろんな制約を受けている。その中で、やはり今までもそうでしたし、原子力はそれなりに安定供給に対して一定の役割を果たしてきておりますし、現在もやはり重要なエネルギー選択の一つの選択肢であるという認識は私個人として持っております。

そういう意味では、やはりそういう政策の一環としまして、再処理をしますとどうしてもプルトニウムが出てきますから、それに対するプルトニウムの有効利用という形でサイクルの政策があったわけですが、このプルトニウムの有効利用に関しては皆さんもご存じのように、高速増殖炉、これが全く不透明、先ほどからよく出てきていますが全く不透明。それからプルサーマル計画につきましても、当初はやはり新型炉のATR、それを開発して云々というのが、これもやはり中止になっています。

そういう中で、軽水炉によるMOX燃料を使うというのはかなりエネルギーの政策としては変遷をしてきたわけですが、こういう核燃料サイクルの中でそういうプルトニウムの利用という意味では、やはり欠くことの出来ない、いわば六ヶ所にそういう核燃料サイクル施設ができた中でMOX燃料加工施設というのは現状ではそういう燃料サイクルを完結させる、閉じさせる意味では無くては為らない施設になっていると考えます。

そういう意味では、非常に核燃料サイクルを一種の国産技術でもって閉じるという意味では一つの重要な意義を持っていると考えます。

当然、経済学者というのはこういうエネルギーをやる時には経済性の評価をします。私も随分前にMOX燃料とワンスルーの経済評価というのを試算ですがやったことがあります。

その頃は六ヶ所とか、国内でMOX燃料を作るという状況ではなくて、海外から持ってきま
すから輸送コストというのが非常に重要な役割を持っていました。そういう試算の中で、M
OX燃料を使う、そういうプロセスの方が割高だというのが出ていましたけれども、今は経
済性を度視視度返ししたような形、高いということが定着してしまっただけで、そういう意味では、
いろんな政策変遷が行われている中で、本当の意味でのサイクル事業全体のコストとワンス
ルー方式のコスト、そういうものの比較による選択にさらされる、そういうことは絶えず
っと継続していくと。

私は、そういうエネルギー選択というのは最終的には意外と経済性、そういうものがある
技術の社会の技術としては確立していても、コスト高で社会に導入されないとか、そういう
ことが長い目で見ていると最終的にはそういう判断に経済性というのが非常に重要な役割を
果たしていると考えます。

そういう意味では、非常に経済性では今のところ全く高いということで定着しているわ
けですが、エネルギー政策上は一つの重要な異議を持っていると。

それから安全性につきましては、ウラン単独で燃すよりもプルトニウムというものを混ぜ
て燃すわけですから、それだけやはり安全性に対するいろんな条件は厳しくなってくるのは
当然であります。そういう意味では、アルファ線が強いか、その他内部被爆の恐れがある
とか、あるいは核反応しやすく制御が難しくなる。そういうものに対して、私も先日いろ
んな説明を聞きましたが、グローブボックスだとか封じ込め対策、あるいは制御棒の効果が
減少することに対する材質の選択だとか、あるいは臨界安全対策。そういうものがいろいろ
考えられているわけで、それはそれなりに事業者が安全性を確保してやるというのは何と
なく納得できます。

ただし、いろんな事故を見ていますと、実際にはそういう協力関係にある建設会社の建設
段階、あるいは設計ミスだとか、あるいはいろんな作業の委託を受けた人が例えばバケツを
使ったりとか、そういうことが多いわけですね。そうすると、原燃でもMOXに関してはお
そらくいろんなサイクル事業とかから技術移転、あるいは技術の継承体制が大切だとい
うことを言われたわけですが、それと同時に、やはり働く人の教育、携わる人の教育だとかい
ろんなものを非常に充実させていってもらわないと安全性自体のことについては事業者だけが
そういう対策を取るといっただけでは不十分だと考えております。

ちょっと長くなってしまったので、これで終わります。

【コーディネーター】

阿波田さん、ありがとうございました。核燃料サイクルを完結させるには欠かせない施設
であると。経済学者の立場から肯定的なご意見でございました。値段は高いとか、ローテク、
基礎的な部分でこれまでトラブルが発生しているので、働く人の教育を充実させろというご
提案もございました。

次は、青森県JA女性組織協議会理事の山口ミキさんです。

【青森県JA女性組織協議会理事 山口ミキ】

山口と申します。よろしく申し上げます。

加工施設設計とか様々そういった細かい数字に関しては、私は専門家の方々を信頼しておりますが、安全性となると不安が残ります。テレビ・新聞等で報道されているように、再処理工場における漏水、高レベル廃棄物保管の設計ミス、国・青森県・村、それぞれのチェック機関がチェックできなかったことです。核燃料サイクル事業で一番怖いのは人的ミスではないかと思っています。再処理工場などを請け負った業者のあまりにもずさんな仕事ぶりに、なぜ国や県がきちんと指導監督ができなかったのか、私達県民にとっては納得のいかないことばかりです。

また、原燃に関わる出向社員の引き継ぎ等の連携ミスもあるのではないのでしょうか。MOX燃料加工施設建設については、今度は本当にミスはないだろうか、ちょっと心配です。技術面では外国の協力も受けておりますし、東海村における国内の研究実験試験、運転等における実績もありますから大丈夫ではないかと思いますが、再処理建設でミスした業者はMOX燃料加工建設を始めるにあたりましては入札から外すことはできないのでしょうか。

私達農業者は農畜産物を販売して生活費を得て暮らしております。農協女性部では直売所におきましても食の安心・安全をアピールして、消費者と信頼関係を築いてきておりますから、こういったMOX燃料加工施設を進めていった場合、事故が起きた場合にはもう一挙に信頼関係は崩れてしまいます。科学的数値が人体に影響がないから大丈夫と言われても納得してもらえません。風評被害の責任はどこが取って下さるのでしょうか。このことは、私は乳肉複合を経営しておりますけれども、BSEでもういやというほど体験いたしました。確かに日本は資源のない国です。国策でこの事業を推進するのであれば、国は国民皆の理解を得て欲しいです。また、電力の節約を都会の人達に呼びかけるのも県として必要ではないでしょうか。

私は六ヶ所村に住んでおります。最近、避難訓練が行われました。訓練の際、近隣町村への連絡は行われましたでしょうか。県、オフサイトセンター、六ヶ所村だけの避難訓練も必要ですが、事故は起きて欲しくない、また起こしてはならないことですが、風の方向など様々ありますと近隣町村の方の被害が大きいことも実際にはあると思います。訓練と実際の事故とでは人間の心理も違い、パニックを起こさないとも限りませんから、近隣町村も交えた避難訓練をする計画はあるのでしょうか。また、JCOの事故の時、放射能の中和剤、ヨード剤と申しましたでしょうか、国内だけでは足りなかったという話を聞いたこともありますが、青森県に備蓄はありますでしょうか。

また、尾駮地区が避難訓練地域になった場合、対策本部の役場やオフサイトセンターはその役割を果たすことができるのでしょうか。MOX燃料の施設から製品が完成して出た場合、それは商品だそうです。この商品は原料を排出した事業者にお買いあげいただけることが必ずできるのででしょうか。そんなことも一つお伺いしたいと思います。

私の発言はこれで終わります。ありがとうございました。

【コーディネーター】

山口さん、ありがとうございました。技術的には大丈夫だと思うけれども、怖いのは人的

ミスだと。自分は農業従事者として事故が起きた時の食の安全・安心の信頼が崩れるから、一つ十分に対策を考えて欲しいというご意見でございました。

次は、陸奥湾漁業振興会会長の三津谷廣明さんです。

【むつ湾漁業振興会会長 三津谷廣明】

ただ今ご紹介いただいた陸奥湾漁業振興会の三津谷と申します。

核燃リサイクル施設とMOX燃料加工施設はね、皆さんもご承知のとおり運動するものと確信している。と言うことは、ただ今阿波田教授がおっしゃったように、いろんなリスクを背負うわけですが、でもじゃあ現実的に、両方とも危険ですよそれは、でも、それを避けて私達エネルギー不足、それから電力不足と、そういう奪い合いの暴動も起きかねないと、こういうことを考えてみますと、いわゆる国も安全、知事さんもいろいろと熟慮の末安全性を取っているわけですが、そういう中でじゃあ我々が危険だけを感じて、そういう対策に対処しないと、こういうことでは非常に又経済的に困窮すると。いろんな、ほら、面がでるわけですが、いずれにせよ、それからもう一つ、知事にお願いしたいのですけれど、原子力対策委員会で安全性の問題でいろんな討議をしたわけですが、通産局の、東北通水産局ですね、その人が、皆さんおっしゃっているが水が漏れたと、少しだからと言ったんですよ。私も原子力、町で第一線に立って運動をしたわけですが、そんな悠長な話をしてよ、県民に問うなんて、その辺から間違っているんですよ。だから、その辺をきちっと、それに関わる役人もね、きちっとしていただきたい。それから、携わる人に徹底した教育、そういうことをやっていかなくてはそれは大変ですよ。

そこで、そういうものを怠ったら、やはり県民から信頼は失われると。こういうことも伝えて申し上げておきます。

それからあと、苫米地ヤス子さんですね、非常に風評被害のことで悩んだようですが、私も実はこの問題に対してはほとんど手を付けてないと、一次産業に対する風評被害に。このこともこの際ご要望しておきたい。

それからあと、皆さんからいろいろ発表を聞いたら、やっぱり今の核燃料とMOXが雇用対策に、経済性につながらないという話がありましたが、ぜひともその雇用対策も、県の経済性を高めるために雇用対策をしっかりとやっていただきたいと、こういうことを要望して、簡単ではございますがお願いの挨拶ですね、お願いの意見にさせていただきます。

どうもありがとうございました。

【コーディネーター】

三津谷さん、ありがとうございました。国は安全だと言っているけれど、水が漏れたとかいろいろ起こっていると。県民の信頼を高めるためには人の教育は非常に重要である。それから雇用対策につながるように一つ配慮していただきたいというご要望でございました。

次は、一般公募の団体役員で下山洋雄さんです。

【団体役員（一般公募）下山洋雄】

僕は青年の視点から若者として発言したいと思います。今日は4点について話を進めていきたいと思います。

まず1点目は、MOX燃料に関わる説明会、日本原燃主催と県の主催を聞いて感じたこと。二つ目は、説明資料のことの安全性について。三つ目は、広報公聴活動について。そして四つは、私自身が感じたことを意見として発表したいと思います。

まず1番目に、この説明会を聞いて僕が感じたことは次のようなことです。一体MOX燃料とは何なのか、本当に安全なものなのか、燃やす装置は大丈夫なのか、なかなか理解できませんでした。資料や説明では基準を

(テープ2 B面)

ずさんな計画が沢山の疑問を県民に与えたことを考えると、ストレートにその安全性を容認することができません。日本原燃がしっかりと今までのことを反省し、安全重視の体制が本当に分かるように県民に訴えるのでなければ広く県民の同意は得られないと思います。今のままでは、住民も県民も不信感を募らせるだけです。

二つ目ですが、僕には分かりますが、説明資料を読んで、僕たちのような若い者にはなかなか面倒な冊子であることに気づきました。例えば、ペレットなどのような難しい用語が次から次へと出てきます。勉強不足もあるでしょうが、だからこそ僕たちのようなものにももっともっと分かるような説明書であればと思います。

三つ目は、広報公聴についてはもっともっと若者達の意見や質問に答えて下さい。率直に言って、若者にこそよく学習して、これからの日本エネルギーには何が良いか選択し考える力が必要だと思っています。いずれにせよ、広報啓発や公聴会などを頻繁に開き、できるだけ多くの人にMOX燃料についての理解が必要と考えます。それを基礎に僕たちは僕たちなりに判断します。

四つ目、日本のエネルギーについてはまだまだ勉強しないことが沢山あります。このような原子力一点張りですが、その他にも石炭・石油などもまだまだ考えなければならないし、風力・水力・火力などもあると思います。もちろん、原子力の利用をその安全性を十分に考えた上で利用していくことも決して否定しません。本当に安心して利用できるエネルギーを皆で作出し、次の世代に伝えていくことが大事だと今考えています。

今日はこのような機会を設けていただき、本当にありがとうございました。

以上です。

【コーディネーター】

下山さん、どうもありがとうございました。今日のご感想を入れて、パンフレットをお読みになって、まだよく理解できないからもっと分かりやすい説明、公聴会を開いていただきたい。原子力の利用は重要だから否定はしないというご意見でございました。

最後になりますが、一般公募の方で団体役員の佐藤和子さん、お願いします。

【団体役員（一般公募）佐藤和子】

先に、とても若い、私の孫のような方がすばらしい発言をしました。私は一桁世代でございます。と言うことは、ちょうど昭和20年、青森空襲を受けて、祖父を失っております。しかも、今度妹が何もこの原子力に関係のない人がです、白血病で亡くなりました。そういう経験を持っております。

と言うことから、私は空襲で焼けた時に、何で、同じ命なのに。原爆の方だって同じ命なのに失われたということで、非常に原子力に興味を持ちました。そして勉強しなければいけないなと思いました。そしてもちろん広島も長崎も、ずっと以前に、今から40年も前に見学に行きました。そして、こうだったのかと。だけでも命の重みは同じじゃないかということで、それはそれでおさめました。

今回、MOX燃料の加工施設について意見を聞く会ということがございましたので、それでは私も参加してみようということで参加させていただいた者の一人でございます。

このような高齢者には、もう電気というのは無ければ生きていけないと思います。と言うのは、大変不自由な生活をした時代を思い起こしながら、もうその頃の人達は、人生わずか50年というような時代でございましたね。それほど大変な時代で生きられなかったのですが、今は80代、90代当たり前に生きられる時代が来ました。これはもう電気の力は非常に大きいと思っております。本当に安全に、しかも大量に供給していただかなければとてもとてもこれからの高齢化社会では生き抜けないのではないかなと思うほどです。

ある時、私は大きな工場の電力はどういうふうになっているのだろうということで、地下ケーブルというところを見学しました。大量に、しかも今の新幹線などの基地にはものすごい量の電力が流されているわけですね。そして、私どもが家庭にいて、一生懸命になって省エネでございます、しかもリサイクルでございますと一生懸命私達は頑張っている団体でございますけれども、あれを見た時に、もうこれが日本の経済を担っているんだということを目の当たりにしたわけです。そして、一昨年でございますけれども、上海の空を見た時に、ちょうど40年前のあの川崎公害の空でございました。もうお日様はカンカンと出ているはずなのに、それが全くスモッグなんですね。そして、「ああ、これでは」と思いました。

と言うことは、化石燃料の危険性です。あの中国、あるいは朝鮮半島ですか、そういうところから西風に乗ってどんどん公害が流れております。その酸性雨はこの原子力よりも怖いなと思いました。と言うのは、草木を枯らしていきます。そして、私どもが命をつなぐ水さえも酸性雨になってきた時には、生きられるのでしょうかということを感じました。

そして、ある時、火力発電所の、福島県の火力発電所を見た時に、あの大きな船にアフリカから石炭を運んできます。と言うことで1ヶ月かかるそうです。しかもそれを陸揚げする時には1週間かかると。それじゃあどれだけ使えるんですかと言ったら、1週間持ちませんと言われた時には愕然としました。そういうような状況の中で、やはり化石燃料の怖さと、そういうことよりも安全に安心して供給していただけるという原子燃料は、今は自然エネルギーがそれに代わるだけの安定供給ができた時に廃止できるものであって、今はこれに頼るしかないんじゃないかと。

と同時に、枯渇されていく資源、そのためにはやっぱりMOX燃料にして、そしてこれはリサイクルをして、そしてやっていかなければ世界中の資源は枯渇するのではないかと思

ます。

私は是非進めていただきたい。と同時に、職員の皆様も、私は長い間労働者でございましたので、もう追いつめられてギリギリと、それはダメ、これはダメと言われますと出来ることも出来なくなります。私達は共に働く人達を見守りながら、どんな仕事でも見守りながら手を携えて、そしてやっていったならば安全で安心できるのではないかなと思います。

県知事さん、よろしく願いいたします。

【コーディネーター】

佐藤さん、ありがとうございます。50年だった人生が80年、70年に伸びたのは電気の力が大きかったと。しかし、その電気を作るのに化石燃料を使ったのではスモッグや酸性雨が出て、これは原子力より怖い。原子力の利用は、あるいはこの加工施設は是非進めて欲しいと、こういうご意見でございました。

これで31人の方々のご意見を伺いました。それで先ほどと同じように、三村知事にコメントをいただきたいと思います。

【三村知事】

大変、31名の皆様方からそれぞれの思いをお話しいただきました。感謝申し上げたいと思います。

コメントということになるわけですが、それぞれ多種多様なご意見であったわけですが、いわば安全ということについてのお話が多かったと感じた次第でございます。前も同じ話を聞いたことがあるぞということになるかもしれませんが、私は知事就任当初から原子力施設安全検証チームを設置するなど、県民の安全はもとより、安心ということに重点をおいたこの問題それぞれに対応するべきと考えておったわけであります。しかしながら、使用済み燃料受け入れ貯蔵施設におけるプール水漏洩の問題、あるいは、本県ではございませんが美浜における発電所の事故など、安全確保を第一義とする原子力施設においてあってはならないことが起きており、このことそれぞれは我々青森県民に大きな不安を与えたところであり、私はそういった場合、それぞれ県議会、市町村長、青森県原子力政策懇話会等々の皆様方からご意見を伺うなど、一つひとつ慎重に手順を踏みながら県民の安全・安心に重点をおいた対応をしてきておる次第でございます。

その一つとして、私どもから日本原燃に対しましては、いわゆる、ご存じと思いますが、全く外部の第三者機関におけるところの品質保証体制、その監査を定期的な受け、それをきちんと県民の皆様方、いや多くは国民の皆様方に報告するということについて強い要求をし、そのことが現在行われている状況にあるわけであります。

さて、私ども青森県原子力政策懇話会の委員であります東京理科大学の久保寺昭子さんという名教授が、安全と安心について次のように述べられていることが私自身は非常に印象を深くしております。それは、安全という言葉は安心という言葉で並べられないと理解しています。安全という言葉は確率統計論に基づいて語られる技術論なんです。安心は一人ひとり価値観が違います。安全に操業した上で安心していただくためには、信頼という架け橋が相

互の人の心と心にかけて始めて安心という言葉が語られます。

こう久保寺先生は話をして下さいました。事業者が安全操業を積み重ねるということは当然のことであるわけですが、そのことだけでは住民の皆様方の安心ということは得られないわけであります。住民の皆様方の心に、県民の皆様方の心に安心という気持ちがあれば本当の安心につながっていかないと思うのであります。

原子力ということについて広く日本国民、そしてまた私ども青森県民の信頼を得るために国や事業者が誠意を持ってどのように取り組んでいくのかということがやはり大きく問われていると私自身も感じる次第でありますし、まさに品質保証その姿勢には終わりはないものだということが国、事業者には大きく問われると、そういったことを考えておるわけでありますし、また今日も大層として31名の方々の大層としてそういう思いを得ました。このことを国、事業者に対しては私からのメッセージと強い思いとしてお話申し上げたいと思います。

以上でございます。

【コーディネーター】

どうもありがとうございました。

何か技術的な補足説明がございますでしょうか。

よろしゅうございますか。

それでは大変ありがとうございました。

何かございますか。

【安全性チェック・検討会 大桃主査】

技術的な問題については特に付け加えることはございませんが、今日の、一つだけ私が付け加えることがあるとすれば、最後からお二人目の若い方からのご意見の中に、報告書を読んでも用語がよく理解できない、もう少し皆に分かりやすい報告書を作って欲しいというお声がありました。それはこの作成に携わった責任者としては、実に耳に痛い言葉でございました。そのことにつきましては、これからこういう問題に関わることもあると思いますので、その時には是非そのことを心して報告書を仕上げていくように努力したいと思っておりますし、先ほど私はお名刺をいただいた時にお名刺をお渡ししました。同じ六ヶ所村におられるということでしたので、是非個人的には研究所にお出でになって、そしていろいろ率直にお話し合いができれば、少しはお役に立てるかなと思っておりました。遠慮なしに、青森県がお作りになった研究所でございますので、六ヶ所村にございます環境科学技術研究所、別に宣伝するわけではございませんが、是非お越しいただけますようにご案内をしたいと思います。

ありがとうございました。

【コーディネーター】

大変いい補足説明をいただきました。そのことは非常に重要なことだと思いますので、関係者の皆様はよく心に留めていただきたいと思います。

これで本日予定されておりました意見発表はすべて終了いたしましたけれども、まだ時間

が若干ございますので、以上の31人の方々とは別に、会場にお見えになった方々でご意見がございましたら、先ほどは一人5分話していただきましたが、沢山お出でになるかと思えます、時間の関係もございますので、3分くらいということで。

それではどうぞ。

【会場から】

どうもご苦労様です。いろいろお話を聞かせていただきながら、本当にようやく今日、初めて県民の間での対話が始まったと感じました。それは、これまでの反対派、あるいは推進派という色分けではなくて、本当にそれぞれの方が言いたいことを、まだ時間の制約があって十分ではなかったですけれども、ようやく何か本当の対話の第一歩が始まったと、そう感じました。

このことをさらに続けて欲しいんです。三村知事さんには本当にいろんな人達がいろんな期待を込めております。ところが、今まで残念ながら原子力政策に関して現れてくるのは副知事の蝦名さんでした。けれども、本当に青森県の舵を取る、青森県民として投票した三村さん自身に原子力政策を県民一人ひとりに問うて欲しいんです。そして、それはそれぞれの利益代表だけではなくて、県民の本当に一人ひとり、先ほどの中学生・高校生からアンケートをいただいたというお話もありましたけれども、それは全県民のアンケートをとって、本当に拙速走ることなくじっくりと何回でも議論を重ねて欲しいんです。これまでの原子力政策に関する説明会はいろいろありました。けれども、皆、推進側の人達がずらっと並ぶ席、あるいは反対派の人達がチョコチョコと。そんな形で、どうしても公平・公正さが保たれたとは言えません。

今回に関しては、本当に、司会の方は普段はラジオで推進を言っている方なのですがけれども、それはそれとして本当に一人ひとりの声を十分に聞いて下さい。それだけです。

お願いします。

【コーディネーター】

どうもありがとうございました。もしよろしければお名前を。

【会場から】

六ヶ所村の福沢と申します。

【コーディネーター】

ありがとうございました。

他にご意見の方、いらっしゃいませんか。

苫米地さん、ちょっとまだ発言をしていらっしゃらない方がございましたらそちらの方を優先したいと思っておりますので。

いかがですか。

苫米地さんのご意見を伺ってもよろしいのですが、他にご意見があれば。

手を挙げていらっしゃる方、どうぞ。

【会場から】

青森市に在住なんですけれども、出稼ぎに行っていて、月に1回青森に帰ってくるという現状でいる梅北と申します。

実は、出稼ぎがてらなんですけれども、国の原子力政策の会議を毎回ウオッチングさせてもらっています。それで、例えば原子力政策、国は長期計画と言って毎年5年ごとに国の政策を変えるんですけれども、例えば、この青森にもご意見を聞く会ということでここで開かれました。それで、青森県民の意見を聞くという形ばかりで、結局は何か中間取りまとめというような形で、バックエンドの問題、本当にゴマンとできてしまう放射能をどうするかという問題で、もう10月だか11月だかも早々と中間取りまとめで再処理路線で行くんだという形でまとめ上げてしまいました。

青森の県民がご意見を聞く会という時に、やっぱり本当に民主的な形で自分達の思い、願い、それを聞いてもらえるんだという格好ばかりで、結局皆さんのご意見を聞きました、聞きおきましたという形ばかりで裏切られました。

だから、私は政治的っていう意味ってよく分からないんですけど、そういうのを政治的っていうのかなと思って、ちょっとこの場も何人か反対派も入れて賛成派も入れて、という形で開かれているんですけれども、この場がもしかしたら政治的っていうやつなのかもしれないなど、とてもちょっと斜めに構えています。

このMOX燃料の加工施設についてご意見を聞く会というのを2・3日前に知ったものですから、どういう経緯でなされたのか分からないのだけれども、民主的な格好だけをつけてということでやっているわけではないでしょうね。

それで、そここのところ本当に心配しています。本当の意味で民主的にするためには、何人かの方が言ったように、これから討論会をしていくと。それで、今、やっぱりご意見を聞く会ということで、いや、三村さんが、いや安全性についていっぱい意見が出たなど。そんだけのことを言っているけど、そうじゃないでしょう。MOX賛成なのか、反対なのか、そこら辺のところを本当に言いたいところなんですよね。本当にやっていいこと、いけないことってあると思うんですよ。安心だからやっていいって、安全だからやっていいって、そういう問題でもないという部分もあると思います。

ともかく、この場、これからの、皆の意見を聞く会、それを政治的な場、政治的な道具として使わないで欲しい。そのための措置を、もしできれば今ここで聞きたいところです。今後も本当に民主的な経緯をもって原子力政策、県として臨むのでしょうか。MOXは賛成、反対、ちゃんと住民の意識を聞いて、それで進めてもらえるのでしょうか。政治的な、単にご意見を聞く会で終わるのでしょうか。そここのところ、とっても疑問に思っています。

【コーディネーター】

どうもありがとうございました。

他にご意見ございませんか。

何か、先ほどなかなか意見を素直に聞いてもらえる機会が無かったと。本日は非常にそういう機会を与えられて良かったと。こういうことで、今まで意見を発表する機会が無かったというご不満が出たのですから、この際、ちょっと時間がございますのでご意見がございましたら出していただきたいと思いますが。

ございませんか。

じゃあ十分に皆様意見は発表なさったんでしょうかね。

苔米地さん、何かおっしゃりたいことがございましたですね。あまり長くならないようにお願いいたします。

【会場から】

今日はありがとうございます。私、旧十和田市に住んでいるんですけど、この頃、小学生の連れ去りとか、凶悪犯罪、地震、災害、いろいろ発生しているんですけど、いざという時のために防災無線が欲しいなと思っています。

私は農家なので田畑に出て働いているんですよ。その時に情報が入らなくて本当に不安です。防災無線で空から声が聞こえたら、私も犯罪を解決するために協力もできると思うのですけれども、この防災無線が欲しい場合はどこにどうやってお願いしたらよろしいでしょうか。

三村さんのお力で一つお願いいたします。

【コーディネーター】

何かお答えはいただけますか。

【環境生活部 高坂部長】

防災無線のお話でございます。防災無線につきましては、県、それから市町村それぞれの役割分担がございます。市町村の中の部分につきましては、これは市町村が整備をしていくという役割分担になってございます。県の部分に関しては、例えば県と言っても県庁、そこにあるだけが県庁ではございません。各地方の出先機関がございます。それもひっくるめての県庁内の内分のやつは県が整備する。市町村の中のやつは市町村が整備するというのが基本的な役割分担になってございます。

従って、基本的には市町村の方にそのお話。

【会場から】

市町村のどなたに。

【環境生活部 高坂部長】

具体的には十和田市にはなりますけれども、どなたとなると私もちょっと不案内でございますので。

【三村知事】

市長にあったらそういうお話が出たというふうにお伝えします。

【コーディネーター】

市長さんにお話下さるそうですから。

他にご質問ございませんか。どうぞ、ご意見でも。

【核燃サイクル阻止一万人訴訟原告団事務局長 山田清彦】

これは要望です。核燃サイクル施設の原子力防災計画、東通原発の防災計画、ともに敷地境界で5マイクロシーベルトで警戒本部設置、そして500マイクロシーベルトで対策本部設置。

他県の例を見ますと、これがずっと低いですね。愛媛県では0.15マイクロシーベルトで警戒本部設置、5マイクロシーベルトで対策本部の設置です。青森県は100倍低いわけです。

こういうことからして、先行する原子力施設の後に出来た青森県がこんなに低い。逆に言うと、安全サイドを高く見ているということは、これは良くないことだと私は思っているんです。もっと高いレベルで設置して、復旧に対応が出来るようにしていかないと、先ほどおっしゃったように六ヶ所村の中で防災訓練をしても非常に不安を抱える。他の地域にはそういう対策ができていない。他県の例を見習って、他県では、先日京都の方で他の地域に逃げるということを受け入れる、そういう訓練さえもしています。青森県はそこを優先的にしなければ、施設の共存共栄ということは形だけでありますので、そこを先行してやって欲しいということを要望します。

【コーディネーター】

どうもありがとうございました。今のご意見は一つ参考にしていただきたいと思います。

他にございませんか、ご意見は。まだちょっと時間がございますが。

はい、どうぞ。

【農業（一般公募） 唸清悦】

今日の皆さんの意見をまとめて、その最大公約数的なところでいくと、やはり私の提案が一番いいのかなと。青森県には原子力施設はいらない、けども、国のことを考えるとエネルギーは必要だとなった場合に、やはり私が提案した東京と。

私はまだ年齢的に、もう40年も生きれますけれども、私の次くらいに日本の将来のことを考えている石原知事は、まあ10年くらいかなと考えると、石原知事が元気なうちに日本にとって理想的な原子力政策を早いうちに見せてあげたいなど、このように思っています。

今日は大変有意義な意見を聞く会だったなと思います。

以上です。

【コーディネーター】

ユニークなご意見をありがとうございました。
他にまだご意見ございますか。
よろしゅうございますか。
どうぞ。

【会場から】

ちょっと厳しい、耳に痛いことになるかもしれませんが。

県で主催している原子力懇話会、やっぱり客観的に見て人数、人選にはどうしても公正さを欠くのではないかと思います。それは、今回のような反対派と言われる人達、あるいは推進派と言われる人達、あるいは中間派の人達、それぞれを少なくとも同数やっぱり入れて下さい。これまで見てみると、出席しながら発言されない委員の方々もいるようです。同時にまた、それぞれの発言がどういうふうに県の原子力行政に反映されているのか、本当に何か今一不透明です、はっきり言って。ですから、それぞれの、どなたかも言いましたが、今回のも含めて、言いつばなし、聞きつばなし、ガス抜きで終わらせて欲しくないのです。具体的にそれぞれの意見をどういうふうに反映させて、県の原子力行政として三村知事さんが責任を持って反映させるのかどうか、そのことを本当に期待して注目して見ております。

ですから、これからの原子力政策、あるいは原子力懇話会に関しても、できれば改めてもう一度それぞれの推進、反対、中立の方々を同数含めて、改めて県民と一緒に、県民の視点でということは三村さんが事あるごとに言っておられます。そのような形で原子力政策を県民に開かれた実質的な議論の場として下さい。お願いいたします。

【コーディネーター】

どうもありがとうございました。

そろそろ予定の時間がまいりましたので、会場の皆様方からご意見を伺う会はこれで終了とさせていただきます。

三村知事におかれましては、本日県民の皆様方からの貴重なご意見を参考にして、総合的な判断をして下さいますように私からもお願いを申し上げます。

本日は皆様のご協力によりまして、無事に予定通りこのご意見を聞く会を終了することができました。ありがとうございました。

【司会 櫻庭資源エネルギー課長】

中村政雄様、本当に長時間にわたりありがとうございました。

それでは閉会にあたりまして、三村知事よりご挨拶を申し上げます。

【三村知事】

本日は雪の中でございます、今どうなっているのか、まだ降っているのかなと思いますが、多くの皆様方から様々な貴重なご意見をいただきました。誠にありがとうございました。

MOX燃料加工施設につきましては、平成13年8月に日本原燃株式会社から立地協力要請

を受けて以来、県としてはこれまで国及び事業者の考え方を確認しつつ、また県議会議員、市町村長、各分野における専門家の皆様方からご意見をいただき、安全確保を第一義に慎重に対応してまいりました。そして、本日までご参加いただきました各界、各層の代表者の方々、並びに県民の皆様方から直接様々なご意見をいただくことができたわけであります。

県といたしましては、今後世界のエネルギー事情、地球環境問題、本日もそういうお話がでました、エネルギー資源の乏しい我が国におけるエネルギー政策、電力事情、そしてまた本日の皆様方のご意見をもととして青森県の将来を見据え、安全確保を第一義に慎重にまた総合判断してまいりたいと考える次第でございます。

本日は大変長時間にわたり、ありがとうございました。雪道でございます。それぞれお気を付けてまたご帰宅いただきますようお願い申し上げます。ご挨拶といたします。

大変ありがとうございました。

【司会 櫻庭資源エネルギー課長】

これをもちまして、MOX燃料加工施設についてご意見を聞く会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。